

Ch.4 近似 Bayes 推論

- \mathcal{X} : 観測データ.

θ : 非観測パラメータ (パラメータ, 潜在変数など)

〈Bayes推論の流れ〉

1 確率モデル $p(\mathcal{X}, \theta)$ の設計.

2. 事後分布 $p(\theta | \mathcal{X})$ の計算, パラメータ更新 (学習)

3. 予測分布の計算 (予測)

- Ch.3で扱ったモデルは単純だったのに、事後分布 $p(\theta | \mathcal{X})$ が

厳密に得られた.

→ 複雑なモデルでは、厳密に $p(\theta | \mathcal{X})$ を得るのは困難!

→ 近似手法を用いて何とかしたい。

§4.1 サンプリングに基づく推論手法.

- $p(\theta | \mathcal{X})$ を求める代わりに、 $p(\theta | \mathcal{X})$ から複数のサンプルを得ることで事後分布の性質を調べることにする。

4.1.1 単純モンテカルロ法.

〈問題設定〉

$$\mathbb{E}_{p(x)}[f(x)] = \int f(x) p(x) dx \text{ を求める.}$$

[仮定] • 積分計算は困難.

サンプリングが容易なことは「/」ない。

• 分布 $p(x)$ からのサンプリングができる.

Th. (大数の法則) 独立に同一分布に従う

$\{\mathbb{X}_i\}$: d -次元 i.i.d. 確率変数列. $E[\mathbb{X}_i] = \mu$.

$$\Rightarrow P\left(\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \mathbb{X}_i = \mu\right) = 1. \quad \leftarrow \text{確率1で標本平均は期待値に収束. } \square$$

- この定理を利用して積分を計算するのか.

単純モンテカルロ法 (Simple Monte Carlo method):

$\mathbb{Z}^{(1)}, \dots, \mathbb{Z}^{(T)} \stackrel{i.i.d.}{\sim} p(\mathbb{Z})$ と T 個サンプリングして,

$$\int f(\mathbb{Z}) p(\mathbb{Z}) d\mathbb{Z} \approx \frac{1}{T} \sum_{t=1}^T f(\mathbb{Z}^{(t)}) \quad \text{と近似可}.$$

→ 大数の法則により 標本平均 $\frac{1}{T} \sum_{t=1}^T f(\mathbb{Z}^{(t)})$ は 確率1で.

期待値 $E_{p(\mathbb{Z})}[f(\mathbb{Z})] = \int f(\mathbb{Z}) p(\mathbb{Z}) d\mathbb{Z}$ は収束するので,

T を十分大きくとるより可.

ex) N 個の観測データ $\mathcal{X} = \{\mathcal{X}_1, \dots, \mathcal{X}_N\}$: given.

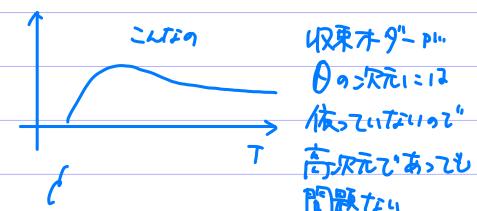
パラメータ θ をもつモデル $p(\mathcal{X}, \theta) = p(\mathcal{X}|\theta)p(\theta)$.

周辺尤度 $p(\mathcal{X}) = E_{p(\theta)}[p(\mathcal{X}|\theta)] = \int p(\mathcal{X}|\theta)p(\theta) d\theta$ と評価.

$p(\mathcal{X}) = \int p(\mathcal{X}|\theta)p(\theta) d\theta \approx \frac{1}{T} \sum_{t=1}^T p(\mathcal{X}|\theta^{(t)})$. ($\theta^{(t)} \stackrel{i.i.d.}{\sim} p(\theta)$)

と近似可れども.

→ ただし、この近似は収束が遅め.



(重複対数の法則より). 収束のオーダーは $O\left(\sqrt{\frac{\log \log T}{T}}\right)$.

$$\begin{aligned} & X_i \stackrel{i.i.d.}{\sim} p, E[X_i] = \mu. \\ & V[X_i] = \sigma^2 < \infty, S_n = \sum_{i=1}^n X_i \Rightarrow P\left(\limsup_{n \rightarrow \infty} \frac{S_n - n\mu}{\sqrt{2n \log \log n}} = \sigma\right) = 1, P\left(\liminf_{n \rightarrow \infty} \frac{S_n - n\mu}{\sqrt{2n \log \log n}} = -\sigma\right) = 1. \end{aligned}$$

4.1.2 棄却サンプリング

「棄却サンプリング」(rejection sampling) :

单纯モンテカルロ法の
サンプリングに利用できます。

密度の計算が困難な目標分布 $p(\mathbf{z})$ からのサンプルを得る方法

次の定理に基いて。

Th. (棄却サンプリング)

$p(\mathbf{z}), q(\mathbf{z})$: pdf. $kq(\mathbf{z}) \geq p(\mathbf{z})$ の包絡函数 といふ

$k > 0$: 定数と $kq(\mathbf{z}) \geq p(\mathbf{z})$ ($\forall \mathbf{z}$) となるように定める。

$\mathbf{z} \sim q(\mathbf{z})$ と $u \sim \text{Uni}(0,1)$ は独立とする。

$\Rightarrow u \leq \frac{p(\mathbf{z})}{kq(\mathbf{z})}$ のもとで \mathbf{z} の条件付 pdf は $p(\mathbf{z})$ となる。 \square

Pf. Bayes の定理より。

$$q(\mathbf{z} | u \leq \frac{p(\mathbf{z})}{kq(\mathbf{z})}) = \frac{P(u \leq \frac{p(\mathbf{z})}{kq(\mathbf{z})} | \mathbf{z}) q(\mathbf{z})}{P(u \leq \frac{p(\mathbf{z})}{kq(\mathbf{z})})}$$

ここで、

$$P(u \leq \frac{p(\mathbf{z})}{kq(\mathbf{z})} | \mathbf{z}) = \int_0^{\frac{p(\mathbf{z})}{kq(\mathbf{z})}} 1 du = \frac{p(\mathbf{z})}{kq(\mathbf{z})}.$$

$$\begin{aligned} P(u \leq \frac{p(\mathbf{z})}{kq(\mathbf{z})}) &= \int P(u \leq \frac{p(\mathbf{z})}{kq(\mathbf{z})} | \mathbf{z}) q(\mathbf{z}) d\mathbf{z} = \int \frac{p(\mathbf{z})}{kq(\mathbf{z})} q(\mathbf{z}) d\mathbf{z} \\ &= \frac{1}{k} \int p(\mathbf{z}) d\mathbf{z} = \frac{1}{k}. \end{aligned}$$

$$\therefore q(\mathbf{z} | u \leq \frac{p(\mathbf{z})}{kq(\mathbf{z})}) = \frac{p(\mathbf{z})/k}{1/k} = p(\mathbf{z}). \quad \blacksquare$$

→ 提案分布 (proposal distribution) $q(\mathbf{z})$ をサンプリングして得た分布は

してあること、 $p(\mathbf{z})$ の $1/k$ 倍で次のようになることかえてある。

Algo. (棄却サンプリング)

Input: 目標分布 $p(x)$, 提案分布 $q(x)$, 定數 k : $kq(x) \geq p(x)$.

$$T \in \mathbb{Z}_{>0}$$

Output: $\{\mathbf{z}^{(1)}, \dots, \mathbf{z}^{(T)}\}$: $p(\mathbf{z})$ からのサンプル.

1 for $t = 1, 2, \dots, T$ do :

2 repeat

$$z \sim q(z); \quad u \sim \text{Uni}(0.1)$$

until $u \leq \frac{p(x)}{kg_p(x)}$; \leftarrow この条件が“みたされると”、サンプルを棄却しリサンプリング。

5 $\mathcal{Z}^{(t)} \leftarrow \mathcal{Z}$ ← サンプルを受容

6 end for ;

7 return $\{x^{(1)}, \dots, x^{(T)}\}$.

1

- ・目標分布 $p(x)$ の正規化定数 pr_p が決まらなくてもサンプリングで"さる"。

$$P(\mathbf{z}) = \frac{1}{Z_p} \tilde{P}(\mathbf{z}) \quad , \quad Z_p = \int \tilde{P}(\mathbf{z}) d\mathbf{z}$$

のとき、 $kq(z) \geq \frac{1}{z_p} \tilde{p}(z) \Leftrightarrow k z_p q(z) \geq \tilde{p}(z)$ つまり、改めて

$k \leftarrow k \times p$ とすれば、 $p(x)$ の約数は $\tilde{p}(x)$ の約数でもある。

ターフ[°]リニク"ア"ズ"エ"ス.

- ・棄却サンプリングの効率： 2~千行目^{タテ}繰り返し回数による

受容確率は $P(\mu \leq \frac{p(x)}{kq_p(x)}) = \frac{1}{k}$. 各回の試行は独立.

→ 受容されるまでの繰り返し回数は幾何分布 $Ge(\frac{1}{k})$ に従う.

$$(Ge(p) の pmf : p(n) = p(1-p)^{n-1})$$

繰り返し回数の期待値は k .

$p(\mathbf{x})$ を近似できるようなもの

c

- k はでてきた「小さな方」が多い。そうなるように、 $q(\mathbf{x})$ をうまく選ぶといい。

そういう $T = q(\mathbf{x})$ を見つけるのは容易ではない。

- この次元が大きくなつてくと、 k が大きくなる傾向にあり初期率が悪くなる。

(次元の呪い)

cf.) 初率を良くするために、 $p(\mathbf{x})$ を区分的に近似する $q(\mathbf{x})$ を使った
適応的棄却サンプリング」といったものもある。

4.1.3 自己正規化重点サンプリング

- 期待値 $\mathbb{E}_{p(\mathbf{x})}[f(\mathbf{x})] = \int f(\mathbf{x}) p(\mathbf{x}) d\mathbf{x}$ を計算するのに、

$$\text{単純MC で } \int f(\mathbf{x}) p(\mathbf{x}) d\mathbf{x} \approx \frac{1}{T} \sum_{t=1}^T f(\mathbf{x}^{(t)}) , \quad \mathbf{x}^{(t)} \sim p(\mathbf{x})$$

と $p(\mathbf{x})$ からのサンプリングがでさる必要がある。

- $p(\mathbf{x})$ からのサンプリングが容易でないときは、上述の棄却サンプリングと利用できた。サンプリングされた $\mathbf{x} \sim q(\mathbf{x})$ に対して

• $p(\mathbf{x})$ が小さいとき \mathbf{x} は棄却されやすいので、 $p(\mathbf{x})$ の大きいサンプルが得られる。

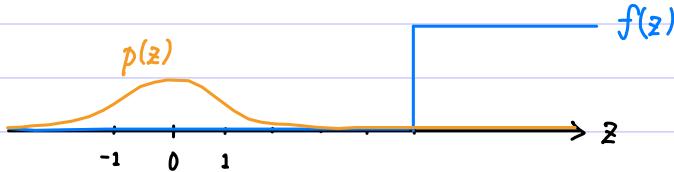
• $|f(\mathbf{x})|$ が小さいとき 和 $\sum_{t=1}^T f(\mathbf{x}^{(t)})$ への寄与が小さいため、

$\mathbb{E}_{p(\mathbf{x})}[f(\mathbf{x})]$ の収束に T をかなり大きくする必要がある。

ex) 極端な $T = "p"$, $p(z) = \mathcal{N}(z | 0, 1)$,

$$f(z) = I(\{z \geq 5\}) = \begin{cases} 1 & (z \geq 5) \\ 0 & (z < 5) \end{cases}$$

とすると下図のような状況になる。



積分 $\int f(z)p(z)dz \neq 0$ $T = "p"$,

$z \geq 5$ の $T = "p"$ を得る確率 p (または 0 のとき, $z^{(t)} \sim p(z)$ となる

$$\frac{1}{T} \sum_{t=1}^T f(z^{(t)})$$

(ただし $t = 1, 2, \dots, T$) 0 となる確率 p (ほとんどの場合 0) ではない。

(近似はでさえも) $p(z)$ が大きくなるほど高次元空間のどこかに $f(z)$ が小さくほとんど計算確率が悪くなる。

以上のような問題は、高次元だとさらに悪化する (次元の呪い)。

$\rightarrow |f(z)|p(z)$ の大きい領域を重点的にサンプリングすること

計算効率を上げる (T となるべく小さな) ことだけでさると良い。

• 重点サンプリング (importance sampling).

サンプリングが容易な提案分布 $q(z)$ を考える。

$f(z)p(z) \neq 0 \Rightarrow q(z) > 0$ と仮定。計算したい期待値は,

$$\mathbb{E}_{p(z)}[f(z)] \quad \text{supp}(q) \supseteq \text{supp}(f \cdot p). \quad (\text{supp}(f) := \{z \mid f(z) \neq 0\}: f \text{ の支持集合})$$

$$= \int f(z)p(z) dz \quad \leftarrow \text{積分は } f(z)g(z) \neq 0 \text{ のところを考慮すれば十分}.$$

$$= \int f(z) \frac{p(z)}{q(z)} g(z) dz. \quad \text{このときは仮定より } q(z) > 0.$$

“ $w(\mathbf{z})$ ”, $w(\mathbf{z}) := \frac{p(\mathbf{z})}{q(\mathbf{z})}$ (重要度重み, importance weight) とおくと,

$$\mathbb{E}_{p(\mathbf{z})}[f(\mathbf{z})] = \int w(\mathbf{z}) f(\mathbf{z}) q(\mathbf{z}) d\mathbf{z} = \mathbb{E}_{q(\mathbf{z})}[w(\mathbf{z}) f(\mathbf{z})].$$

よって、単純MCのように

$$\mathbb{E}_{p(\mathbf{z})}[f(\mathbf{z})] \approx \frac{1}{T} \sum_{t=1}^T w(\mathbf{z}^{(t)}) f(\mathbf{z}^{(t)}) \quad (\mathbf{z}^{(t)} \stackrel{i.i.d.}{\sim} q(\mathbf{z}))$$

と近似すること “ $T \rightarrow \infty$ のとき右辺は $\mathbb{E}_{q(\mathbf{z})}[w(\mathbf{z}) f(\mathbf{z})] = \mathbb{E}_{p(\mathbf{z})}[f(\mathbf{z})]$

\curvearrowleft almost surely.

に収束する。

・近似値の分散について考えてみる。

$$I := \mathbb{E}_{p(\mathbf{z})}[f(\mathbf{z})], \quad \hat{I} := \frac{1}{T} \sum_{t=1}^T w(\mathbf{z}^{(t)}) f(\mathbf{z}^{(t)}) \text{ とおく}$$

$$\mathbb{E}_{q(\mathbf{z})}[\hat{I}] = \frac{1}{T} \sum_{t=1}^T \mathbb{E}_{q(\mathbf{z})}[w(\mathbf{z}) f(\mathbf{z})] = I \text{ なので}.$$

$$\mathbb{V}_{q(\mathbf{z})}[\hat{I}]$$

$$= \mathbb{E}_{q(\mathbf{z})}[\hat{I}^2] - I^2$$

$$= \frac{1}{T^2} \mathbb{E}_{q(\mathbf{z})} \left[\sum_{t=1}^T w(\mathbf{z}^{(t)})^2 f(\mathbf{z}^{(t)})^2 + 2 \sum_{s < t} w(\mathbf{z}^{(s)}) f(\mathbf{z}^{(s)}) w(\mathbf{z}^{(t)}) f(\mathbf{z}^{(t)}) \right] - I^2$$

$$= \frac{1}{T^2} \sum_{t=1}^T \mathbb{E}_{q(\mathbf{z})}[w(\mathbf{z})^2 f(\mathbf{z})^2] + \frac{2}{T^2} \sum_{s < t} \mathbb{E}_{q(\mathbf{z})}[w(\mathbf{z}) f(\mathbf{z})]^2 - I^2$$

$$= \frac{1}{T} \mathbb{E}_{q(\mathbf{z})}[w(\mathbf{z})^2 f(\mathbf{z})^2] + \frac{2}{T^2} \cdot \frac{T(T-1)}{2} I^2 - I^2$$

$$= \frac{1}{T} \mathbb{E}_{q(\mathbf{z})}[w(\mathbf{z})^2 f(\mathbf{z})^2] - \frac{1}{T} I^2$$

$$= \frac{1}{T} \left(\mathbb{E}_{q(\mathbf{z})}[w(\mathbf{z})^2 f(\mathbf{z})^2] - I^2 \right). \quad (= \frac{1}{T} \mathbb{V}_{q(\mathbf{z})}[w(\mathbf{z}) f(\mathbf{z})])$$

・ $\mathbb{E}_{q(\mathbf{z})}[w(\mathbf{z})^2 f(\mathbf{z})^2] < \infty$ でないと、近似値 \hat{I} の分散 \mathbb{V} が ∞ となる。

$w(\mathbf{z})$ の分子は $q(\mathbf{z})$ なので、 $q(\mathbf{z})$ が $p(\mathbf{z})$ より $p(\mathbf{z}) \neq 0$ の近傍に $w(\mathbf{z})$ が

大きくなり分散が発散するみそれがある。

$\rightarrow q(\mathbf{z})$ は $p(\mathbf{z})$ より “裾の厚い” もつて “重い” といふ。

- $\mathbb{E}_{q(\mathbf{z})} [w(\mathbf{z})^2 f(\mathbf{z})^2] < \infty$ のとき, Jensen の不等式より,

$$\mathbb{E}_{q(\mathbf{z})} [w(\mathbf{z})^2 f(\mathbf{z})^2]$$

$$\geq \left(\mathbb{E}_{q(\mathbf{z})} [w(\mathbf{z}) |f(\mathbf{z})|] \right)^2.$$

$I \subseteq \mathbb{R}$: 区間, $h: I \rightarrow \mathbb{R}$: 凸函数。

$X: I$ -値確率変数, $\mathbb{E}[X] < \infty$.

$\Rightarrow \mathbb{E}[h(X)] \geq h(\mathbb{E}[X])$.

等号成立は $X = \mathbb{E}[X]$, a.s. のとき

$$\text{等号成立は}, \quad |f(\mathbf{z})| w(\mathbf{z}) = \mathbb{E}_{q(\mathbf{z})} [|f(\mathbf{z})| w(\mathbf{z})], \text{ a.s.}$$

$$\Leftrightarrow q(\mathbf{z}) \propto |f(\mathbf{z})| w(\mathbf{z}), \text{ a.s. のとき.}$$

$\rightarrow q$ で $|f(\mathbf{z})| w(\mathbf{z})$ の大きい範囲を重点的にサンプリングすると良い。

これが存在からわかる。

- 自己正規化重心サンプリング (self-normalized importance sampling).

上では p, q とも pdf としてきた。ここでは、

$$p(\mathbf{z}) = \frac{1}{Z_p} \tilde{p}(\mathbf{z}), \quad q(\mathbf{z}) = \frac{1}{Z_q} \tilde{q}(\mathbf{z})$$

として、 $\tilde{p}(\mathbf{z}), \tilde{q}(\mathbf{z})$ のみから計算できる状況を考える。

(つまり $q(\mathbf{z})$ からのサンプリング(上でやるもととする)

$$\mathbb{E}_{p(\mathbf{z})} [f(\mathbf{z})]$$

$$= \int f(\mathbf{z}) \frac{p(\mathbf{z})}{q(\mathbf{z})} q(\mathbf{z}) d\mathbf{z}.$$

$$= \frac{Z_p}{Z_q} \int f(\mathbf{z}) \frac{\tilde{p}(\mathbf{z})}{\tilde{q}(\mathbf{z})} q(\mathbf{z}) d\mathbf{z}.$$

ここで、 $\tilde{w}(\mathbf{z}) := \frac{\tilde{p}(\mathbf{z})}{\tilde{q}(\mathbf{z})}$ とすると、

$$\frac{\mathbb{Z}_p}{\mathbb{Z}_q} = \frac{1}{\mathbb{Z}_q} \int \tilde{p}(z) dz = \frac{1}{\mathbb{Z}_q} \int \frac{\tilde{p}(z)}{\tilde{q}(z)} \tilde{q}(z) dz$$

$$= \int \tilde{w}(z) q(z) dz = \mathbb{E}_{q(z)}[\tilde{w}(z)]$$

なぜ、

$$\mathbb{E}_{p(z)}[f(z)] = \frac{\mathbb{E}_{q(z)}[\tilde{w}(z)f(z)]}{\mathbb{E}_{q(z)}[\tilde{w}(z)]}.$$

よって、T個のサンプル $z^{(1)}, \dots, z^{(T)} \stackrel{i.i.d.}{\sim} q(z)$ を用いて

$$\mathbb{E}_{q(z)}[\tilde{w}(z)f(z)] \approx \frac{1}{T} \sum_{t=1}^T \tilde{w}(z^{(t)}) f(z^{(t)}),$$

$$\mathbb{E}_{q(z)}[\tilde{w}(z)] \approx \frac{1}{T} \sum_{t=1}^T \tilde{w}(z^{(t)})$$

と近似するなど、i.e.,

$$\mathbb{E}_{p(z)}[f(z)] \approx \frac{\frac{1}{T} \sum_{t=1}^T \tilde{w}(z^{(t)}) f(z^{(t)})}{\frac{1}{T} \sum_{t=1}^T \tilde{w}(z^{(t)})} = \sum_{t=1}^T \frac{\tilde{w}(z^{(t)})}{\sum_{t'=1}^T \tilde{w}(z^{(t')})} f(z^{(t)})$$

=: w^*(z^{(t)}) とみく

と近似する。
 $\cdot \sum_{t=1}^T w^*(z^{(t)}) = 1$ なぜ "自己正規化".

Algo. (自己正規化重点サンプリング)

Input: 目標分布 p の主要項 $\tilde{p}(z)$, 提案分布 $q(z) = \frac{1}{\mathbb{Z}_q} \tilde{q}(z)$,

函数 $f(z)$, $T \in \mathbb{Z}_{>0}$.

Output: 期待値 $I = \mathbb{E}_{p(z)}[f(z)]$ の近似値 \hat{I} .

1. for $t = 1, \dots, T$ do :

2. $z^{(t)} \sim q(z); \tilde{w}(z^{(t)}) \leftarrow \frac{\tilde{p}(z^{(t)})}{\tilde{q}(z^{(t)})}$

3. end for;

$$4. \quad \mathcal{N} \leftarrow \sum_{t=1}^T \tilde{w}(\mathbf{z}^{(t)}) ;$$

5. for $t = 1, \dots, T$ do :

$$6. \quad w^*(\mathbf{z}^{(t)}) \leftarrow \frac{1}{\mathcal{N}} \tilde{w}(\mathbf{z}^{(t)})$$

7. end for ;

$$8. \quad \text{return } \sum_{t=1}^T w^*(\mathbf{z}^{(t)}) f(\mathbf{z}^{(t)}) \text{ as } \hat{I} .$$

Remark (1) $\mathbb{E}_{q(\mathbf{z})} \left[\sum_{t=1}^T w^*(\mathbf{z}^{(t)}) f(\mathbf{z}^{(t)}) \right] \neq I$ であります, $\sum_{t=1}^T w^*(\mathbf{z}^{(t)}) f(\mathbf{z}^{(t)}) \mid_{\mathcal{I}} I$,

不偏推定量ではない しかし, $\mathbb{E}_{q(\mathbf{z})} \left[\sum_{t=1}^T w^*(\mathbf{z}^{(t)}) f(\mathbf{z}^{(t)}) \right] \xrightarrow{T \rightarrow \infty} I$, a.s.

であります, 渐近不偏推定量になっています

(2) \hat{I} の分散が最小になるのは $q(\mathbf{z}) \propto |f(\mathbf{z}) - I| p(\mathbf{z})$ のとき

(Hesterberg, 1988)

(3) 異却サンプリングは 重点サンプリングの特別な場合とみなせる。

cf.) 古澄『ベイズ計算統計学』

(4) 重点サンプリングでは, $\mathbf{z}^{(t)} \stackrel{\text{i.i.d.}}{\sim} q(\mathbf{z})$ としていたので, $p(\mathbf{z})$ からのサンプリング

得られないまま, サンプリング-重点リサンプリング (Sampling/importance resampling: SIR)

を利用すると 近似的に $p(\mathbf{z})$ に従ったサンプルを得ることができます。

cf.) Bishop: PRML, 古澄『ベイズ計算統計学』など。

4.1.4. Markov連鎖モンテカルロ法

- Markov連鎖モンテカルロ法 (Markov Chain Monte Carlo : MCMC) :

高次元の分布 $p(\mathbf{z})$ から効率的にサンプリングを行うための方法.

Def. (Markov連鎖)

$\{\mathbf{z}^{(i)}\}_{i=1}^{\infty}$: 確率変数列. → 前の「状態」に影響されない.

$$p(\mathbf{z}^{(t)} | \mathbf{z}^{(t-1)}, \dots, \mathbf{z}^{(1)}) = p(\mathbf{z}^{(t)} | \mathbf{z}^{(t-1)})$$

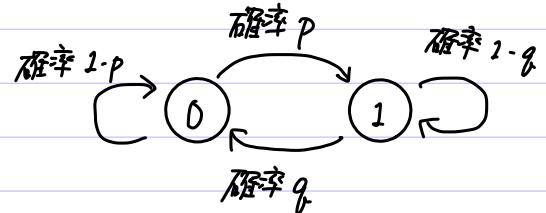
p 成り立つとき, $\{\mathbf{z}^{(i)}\}_{i=1}^{\infty}$ は (1次の) Markov連鎖 という.

- $T(\xi, \mathbf{z}) := p(\mathbf{z} | \xi)$: 遷移確率密度 という.

ex) (有限状態の Markov連鎖)

状態 0, 1 にとって,

右図のように状態間に遷移していき.



$$\mathbf{z}^{(i)} = 0 のときは \quad p(\mathbf{z}^{(i+1)} | \mathbf{z}^{(i)}) = \text{Bern}(\mathbf{z}^{(i+1)} | p),$$

$$\mathbf{z}^{(i)} = 1 のときは \quad p(\mathbf{z}^{(i+1)} | \mathbf{z}^{(i)}) = \text{Bern}(\mathbf{z}^{(i+1)} | 1-p)$$

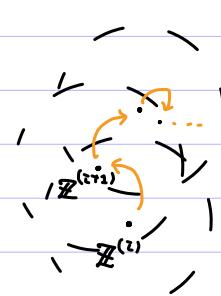
$\mathbf{z}^{(i+1)}$ は $\mathbf{z}^{(i)}$ のみに依存. \Rightarrow 1次の Markov連鎖. ふつうは行列の形で

$$T(\mathbf{z}^{(i)}, \mathbf{z}^{(i+1)}) = \text{Bern}(\mathbf{z}^{(i+1)} | p^{1-\mathbf{z}^{(i)}} (1-p)^{\mathbf{z}^{(i)}}) \text{ と表せ. } \begin{pmatrix} 1-p & p \\ q & 1-q \end{pmatrix} \text{ と表す} \quad \text{遷移確率行列}$$

$$\text{ex)} \quad \mathbf{z}^{(i+1)} = \mathbf{z}^{(i)} + \mathbf{\epsilon}_i, \quad \mathbf{\epsilon}_i \sim \mathcal{N}(0, I_2)$$

$\{\mathbf{z}^{(i)}\}_{i=1}^{\infty}$ は Markov連鎖.

$$T(\mathbf{z}^{(i)}, \mathbf{z}^{(i+1)}) = \mathcal{N}(\mathbf{z}^{(i+1)} | \mathbf{z}^{(i)}, I_2).$$



〈ヤリナヒニト〉

$T(\xi, z)$ をうまく設計して、サンプリングして分布 $p(z)$ に従うような

Markov 運鎖 $\{z^{(i)}\}_{i=1}^{\infty}$, $z^{(i)} \sim p(z)$ と得たい。

$\leftarrow z^{(i)}$ は同分布に従うが、独立ではないことに注意。

- $z^{(i)} \sim p(z) \Rightarrow z^{(m)} \sim p(z)$ となるような分布を“定常分布”という：

Def. (定常分布)

確率分布 P で、全ての z に対して

$$P(z) = \int p(\xi) T(\xi, z) d\xi$$

P 成り立つとき、 P を定常分布 (stationary distribution) という。

- 定常分布はいつでも存在するとは限らないし、存在しても一意とは限らない。

定常分布が存在するための十分条件として、次がある。

Th. (詳細釣り合い条件)

分布 P と遷移確率密度 T で、全ての z, ξ に対して

$$p(z) T(z, \xi) = p(\xi) T(\xi, z)$$

マスター方程式から出でてくる式。

$\leftarrow z$ から ξ に移る“確率”と

ξ から z に移る“確率”が等しいということ。

T 満たされると、 P は Markov 運鎖の定常分布。

pf. 両辺を $\int_{-\infty}^{\infty}$ 積分。

$$\int p(z) T(z, \xi) d\xi = p(z) \underbrace{\int T(z, \xi) d\xi}_{=1} = p(z).$$

$$\therefore p(z) = \int p(\xi) T(\xi, z) d\xi$$



- MCMCでは T が詳細釣り合い条件を満たすようにならねばならない。

この章で重要なのは、定常分布です。

- P が定常になら T 歩みで計算しても、初期値 $\pi^{(1)}$ が $P(\pi)$ に従うように

サンプリングで“きなければ”， P に従う変数からなる Markov 遷鎖 $\{\pi^{(i)}\}_{i=1}^{\infty}$

は得られる。

どこか後にはもとにます

遷移をくり返した後の“極限分布”か
定常分布と一致する、ということ。

どんな $\pi^{(1)}$ から始めても、十分ステップ後の変数 $\pi^{(T)}$ が $P(\pi)$ に従うようにな

なってくれればよい。 $(\pi^{(T)} \rightarrow \pi^{(1)})$ とおけば P に従う変数からなる

Markov 遷鎖 $\{\pi^{(i)}\}_{i=1}^{\infty}$ 得られるこことなる (burn-in)

△ まさに独立な変数をサンプリしてもいい、
これから間引きもすればよい。

→ エルゴード性 (ergodicity).

- | | | | |
|----|-------------------------------|---------------|-----------------------|
| 既約 | ： どの変数も、任意の π' へ有限回で遷移可能。 | △ 定常分布の存在と一意性 | |
| | 正再帰的 | | ： どの変数も、有限回の遷移で戻してくる。 |
| | 非周期的 | | ： どの変数も、周期的に現れない |

T Markov 遷鎖のことエルゴード的という。

Fact. (1) エルゴード的な Markov 遷鎖 $\{\pi^{(i)}\}_{i=1}^{\infty}$ は唯一つの定常分布 P である。

(2) 任意の初期値 $\pi^{(1)}$ に対して、 $\pi^{(i)}$ の従う分布は

$i \rightarrow \infty$ の極限で P に法則収束する。

(3) $E_{P(\pi)}[f(\pi)] < \infty$ のとき、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n f(\pi^{(i)}) = E_{P(\pi)}[f(\pi)] \leftarrow \text{これ計算をする分には burn-in とかも必要ですか}$$

が成立する (Markov 遷鎖に対するエルゴード定理)

→ MCMC では基本的にエルゴード的な Markov 遷鎖になります！

4.1.5 Metropolis-Hastings法.

- \mathcal{T} をうまく設計するためには、次のように仮定してみる：

$$\mathcal{T}(\zeta, z) = A(\zeta, z) q(z|\zeta)$$

• $q(z|\zeta)$ ：遷移確率密度、提案分布。

• $A(\zeta, z) \in [0, 1]$ ：採択率

$\rightarrow \zeta$ から z へと仮に遷移したうえ、確率 $A(\zeta, z)$ で z を採択し、

確率 $1 - A(\zeta, z)$ で z を棄却して ζ に戻る。ということ。

このとき、詳細釣合式は、 $\forall z, \zeta \in$

$$p(z) A(z, \zeta) q(\zeta|z) = p(\zeta) A(\zeta, z) q(z|\zeta)$$

$$\Leftrightarrow \frac{A(\zeta, z)}{A(z, \zeta)} = \frac{p(z) q(\zeta|z)}{p(\zeta) q(z|\zeta)} =: \rho(\zeta, z).$$

Lem. 任意の $p(z), q(z|\zeta)$ に対して、次の $A(\zeta, z)$ は詳細釣合式を満たす：

$$A(\zeta, z) = \min\left(1, \rho(\zeta, z)\right)$$

pf. $\rho(z, \zeta) = \rho(\zeta, z)^{-1}$ に注意する。

$$\frac{A(\zeta, z)}{A(z, \zeta)} = \frac{\min(1, \rho(\zeta, z))}{\min(1, \rho(\zeta, z)^{-1})} = \frac{\min(\rho(\zeta, z), \rho(\zeta, z)^2)}{\min(\rho(\zeta, z), 1)}$$

$$= \begin{cases} \frac{\rho(\zeta, z)}{1} & (\rho(\zeta, z) \geq 1) \\ \frac{\rho(\zeta, z)^2}{\rho(\zeta, z)} & (\rho(\zeta, z) < 1) \end{cases}$$

$$= \rho(\zeta, z)$$



$$\rightarrow q(\boldsymbol{z}|\boldsymbol{\xi}) \text{ とうまく選べば}, \quad T(\boldsymbol{\xi}, \boldsymbol{z}) = q(\boldsymbol{z}|\boldsymbol{\xi}) \min(1, p(\boldsymbol{\xi}, \boldsymbol{z}))$$

で Markov 連鎖のエルゴード性が保証される。

$$q(\boldsymbol{z}|\boldsymbol{\xi}) = N(\boldsymbol{z}|\boldsymbol{\xi}, I_d) \text{ などとしておりOK.}$$

cf.) Robert and Casella "Monte Carlo Statistical Methods".

Algo. (Metropolis-Hastings)

Input: 目標分布 $p(\boldsymbol{z})$, 提案分布 $q(\boldsymbol{z}|\boldsymbol{\xi})$. 繰り返し回数 $N \in \mathbb{Z}_>$.

Output: Markov 連鎖 $\{\boldsymbol{z}^{(i)}\}_{i=1}^N$

1. $\boldsymbol{z}^{(1)}$ をランダムに初期化；

2. for $i = 1, \dots, N-1$ do :

3. $\boldsymbol{z}^* \sim q(\boldsymbol{z}|\boldsymbol{z}^{(i)})$; $u \sim \text{Unif}(0, 1)$;

4. $r \leftarrow p(\boldsymbol{z}^{(i)}, \boldsymbol{z}^*)$;

5. if $u \leq \min(1, r)$:

6. $\boldsymbol{z}^{(i+1)} \leftarrow \boldsymbol{z}^*$ ← 採択

7. else :

8. $\boldsymbol{z}^{(i+1)} \leftarrow \boldsymbol{z}^{(i)}$ ← 棄却

9. return $\{\boldsymbol{z}^{(i)}\}_{i=1}^N$.

Remark p のやうに、正規化されていない \tilde{p} を用いても良い ($p(\boldsymbol{\xi}, \boldsymbol{z})$ は等しい)

$q(\boldsymbol{z}|\boldsymbol{\xi}) = q(\boldsymbol{\xi}|\boldsymbol{z})$ (対称) のとき Metropolis 法 といふ。

4.1.6 ハミルトニアン・モンテカルロ法

- $q \in \text{Gauss 分布}$ と \propto Metropolis-Hastings 法 :

◦ 分散を大きくする

1回の遷移での平均移動距離が大きくなる

✓ $\pi^{(i)}$ と $\pi^{(i+1)}$ の相關 低.

✗ 目標分布から外れて棄却率大.

◦ 分散を小さくする

✓ 採択率 大

✗ $\pi^{(i)}$ と $\pi^{(i+1)}$ の相關 高 \Rightarrow 目標分布からのサンプルを得るまで時間かかる.

→ 高次元だと分散の調整は困難. 特に採択率の低下が著しくなる.

高次元空間で平均移動距離が長くれて、採択率を高くすることは

できるのか...?

- ハミルトニアン モンテカルロ法 / ハイブリッド・モンテカルロ法

(Hamiltonian / Hybrid Monte Carlo : HMC) :

解析力学的な物体の軌道のシミュレーション + Metropolis-Hastings.

→ 効率のよいサンプリングができる.

4.1.6.1 Hamiltonian のシミュレーション.

- 17レクチャー 物理の復習

- 質量 $m = 1$ の物体を考える。

$\mathbf{z} = \mathbf{z}(\tau)$: 時刻 τ の位置ベクトル

$\mathbf{P} = \mathbf{P}(\tau) = \frac{d}{d\tau} \mathbf{z}$: 時刻 τ の運動量ベクトル
← \mathbf{z} の微分であるとす

- $\mathcal{U}(\mathbf{z})$: 位置 \mathbf{z} における物体の位置エネルギー (ポテンシャル)

$\mathcal{K}(\mathbf{P}) = \frac{1}{2} \mathbf{P}^T \mathbf{P}$: 運動量 \mathbf{P} による物体の運動エネルギー。

- 今考える運動では、ポテンシャルにのみ力のみが働くとする。

$\rightarrow \frac{d}{d\tau} \mathbf{P} = - \frac{\partial}{\partial \mathbf{z}} \mathcal{U}(\mathbf{z})$: ポテンシャルの下での運動方程式。
加速度 力

$\mathcal{H}(\mathbf{z}, \mathbf{P}) := \mathcal{U}(\mathbf{z}) + \mathcal{K}(\mathbf{P})$: 系の全エネルギー (Hamiltonian)

- $(\mathbf{z}, \mathbf{P}) \in \mathbb{R}^d \times \mathbb{R}^d$ を考えて、空間 $\mathbb{R}^d \times \mathbb{R}^d$ を相空間 (phase space) とする。

Lem. (Hamiltonの運動方程式)

$$\frac{d}{d\tau} \mathbf{z} = \frac{\partial}{\partial \mathbf{P}} \mathcal{H}(\mathbf{z}, \mathbf{P}), \quad \frac{d}{d\tau} \mathbf{P} = - \frac{\partial}{\partial \mathbf{z}} \mathcal{H}(\mathbf{z}, \mathbf{P}).$$

pf. $\frac{\partial}{\partial \mathbf{P}} \mathcal{H}(\mathbf{z}, \mathbf{P}) = \frac{\partial}{\partial \mathbf{P}} \mathcal{K}(\mathbf{P}) = \mathbf{P} = \frac{d}{d\tau} \mathbf{z}$.

$$\frac{\partial}{\partial \mathbf{z}} \mathcal{H}(\mathbf{z}, \mathbf{P}) = \frac{\partial}{\partial \mathbf{z}} \mathcal{U}(\mathbf{z}) = - \frac{d}{d\tau} \mathbf{P}.$$

□

(ポイント)

- Hamiltonian は保存量。実際、

$$\frac{d\mathcal{H}}{d\tau} = \sum_{i=1}^d \left(\frac{\partial \mathcal{H}}{\partial z_i} \frac{dz_i}{d\tau} + \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial p_i} \frac{dp_i}{d\tau} \right) = \sum_{i=1}^d \left(\frac{\partial \mathcal{H}}{\partial z_i} \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial p_i} - \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial p_i} \frac{\partial \mathcal{H}}{\partial z_i} \right) = 0.$$

→ 物体は \mathcal{H} を一定に保ったまま運動する。

相空間内の運動の軌道は、Hamiltonの運動方程式を解けば求まる。

2. 可逆性 (reversibility) :

$$T_\tau(z(\tau), p(\tau)) := (z(\tau+\sigma), p(\tau+\sigma)) \text{ とすると,}$$

変換 T_σ は逆変換 $T_{-\sigma}^{-1} = T_{-\sigma}$ である.

3. 体積保存 (volume preservation) :

相空間内の領域 $D \subseteq \mathbb{R}^d \times \mathbb{R}^d$ について, D の体積と

$T_\sigma(D) = \{T_\sigma(z, p) \mid (z, p) \in D\}$ の体積は等しい (Liouville の定理).

$$(i.e., \mathbf{v} = \left(\frac{dz}{d\tau}, \frac{dp}{d\tau} \right) \text{ とすると } \operatorname{div} \mathbf{v} = 0.)$$

領域の体積拡大率

$\rightarrow T_\sigma z''(z, p)$ を微小変換しても, 変換の Jacobian は 1 となる.

- T_σ による変換を求めるには, Hamilton の運動方程式

$$\frac{d}{d\tau} z = \frac{\partial}{\partial p} \mathcal{H}(z, p), \quad \frac{d}{d\tau} p = -\frac{\partial}{\partial z} \mathcal{H}(z, p)$$

と解けばよい. 数値的に解く.

$\varepsilon > 0$: 微小時間幅. $\tilde{z}^\tau = (z(\tau) \text{ の計算値})$ などのように書く

- (前進) Euler 法 では $\frac{d}{d\tau} z \approx \frac{z(\tau+\varepsilon) - z(\tau)}{\varepsilon}$ などと近似して,

$$\begin{aligned} \tilde{z}^{\tau+\varepsilon} &= \tilde{z}^\tau + \varepsilon \frac{\partial}{\partial p} \mathcal{H}(z, p) \Big|_{z=\tilde{z}^\tau, p=p^\tau} = \tilde{z}^\tau + \varepsilon \frac{d}{d\tau} z \Big|_{z=\tilde{z}^\tau, p=p^\tau} \\ &= \tilde{z}^\tau + \varepsilon p^\tau \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \tilde{p}^{\tau+\varepsilon} &= p^\tau - \varepsilon \frac{\partial}{\partial z} \mathcal{H}(z, p) \Big|_{z=\tilde{z}^\tau, p=p^\tau} = p^\tau + \varepsilon \frac{d}{d\tau} p \Big|_{z=\tilde{z}^\tau, p=p^\tau} \\ &= p^\tau - \varepsilon \frac{\partial}{\partial z} \mathcal{U}(z) \Big|_{z=\tilde{z}^\tau} \end{aligned}$$

というスキームで ε 時刻先の相空間での座標を計算.

誤差 $O(\varepsilon)$

→ Euler法は離散化の数値誤差が大きい (1次精度)

- リーフロッグ法では、運動量の离散化を $\frac{\varepsilon}{2}$ 刻みで行なう。

$$\left\{ \begin{array}{l} 1. \quad p^{\tau+\frac{\varepsilon}{2}} = p^\tau - \frac{\varepsilon}{2} \frac{\partial}{\partial z} U(z) \Big|_{z=z^\tau} \\ 2. \quad z^{\tau+\varepsilon} = z^\tau + \varepsilon p^{\tau+\frac{\varepsilon}{2}} \quad \leftarrow \text{「計算式」} \\ 3. \quad p^{\tau+\varepsilon} = p^{\tau+\frac{\varepsilon}{2}} - \frac{\varepsilon}{2} \frac{\partial}{\partial z} U(z) \Big|_{z=z^{\tau+\varepsilon}} \end{array} \right.$$

$L \in \mathbb{Z}_{>0}$: ステップ数として、上の更新を L 回行い、時刻 εL 先。

物体の位置と運動量 $(z^{\tau+\varepsilon L}, p^{\tau+\varepsilon L})$ を計算する。

→ 数値誤差が Euler 法よりも小さくなる (2次精度)

また、このスキームは 可逆性 があり、 $(z^{\tau+\varepsilon L}, p^{\tau+\varepsilon L})$ は $-\tau$ 方向に

リーフロッグ法を L 回行うと、もとの (z^τ, p^τ) が得られる。

さらに、シンプレクティック性を有しており、 $(z^\tau, p^\tau) \mapsto (z^{\tau+\varepsilon L}, p^{\tau+\varepsilon L})$ の

変換で Hamiltonian が保存される。 ← もともん誤差は 2 次だから、運動量が守られる

cf.) シンプレクティック積分法 (Symplectic Integrator)

- T_σ のシミュレートをする上では、リーフロッグ法を利用するのが良い。

4.1.6.2 サンプリングアルゴリズムへの適用。

- サンプリングルールの分布を $p(z) = \frac{1}{Z} \tilde{p}(z)$ とする。 $(z \in \mathbb{R}^d)$

$p \in \mathbb{R}^d$ が導入して、同時分布を $p(z, p) = p(z)p(p)$ とする。

(p と z は独立だと仮定している)

$(z, p) \in P(z, p)$ ならサンプリングすること、 z は p と無関係に $P(z)$ ならサンプリングされることとなる。

- $P(p) = \mathcal{N}(p | 0, I_d) = \frac{1}{\sqrt{(2\pi)^d}} \exp(-\frac{1}{2} p^T p)$ とする。

$$P(z) = \frac{1}{z} \tilde{P}(z) = \frac{1}{z} \exp(-U(z)) \text{ と表す。} \quad \leftarrow \tilde{P}(z) > 0 \text{ なのでこのように表す。}$$

同時分布は、

$$P(z, p) = \frac{1}{z} \frac{1}{\sqrt{(2\pi)^d}} \exp(-U(z) - \frac{1}{2} p^T p) \propto \exp(-H(z, p)) \\ = K(p)$$

となる。

- Metropolis-Hastings 法では、提案分布 $q(\zeta | \xi)$ のサンプリングをしていた。

Hamiltonian Monte Carlo では、代わりに $\phi \in \mathcal{N}(\phi | 0, I_d)$ ならサンプリングし、

(ζ, ϕ) の位置から τ たつ時間発展させて得られる

$(z, p) = T_\tau(\zeta, \phi)$ への遷移を考える。
本当にこの leapfrog 補近似を考えている。

T_τ の体積保存性から、推移確率密度 π

$$\mathcal{T}((\zeta, \phi), (z, p)) = \exp(-H(z, p) + H(\zeta, \phi))$$

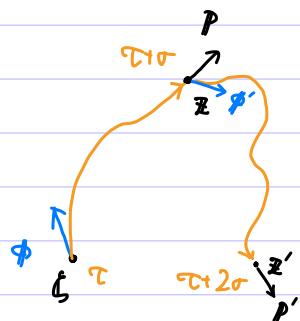
となる。更に可逆性より 同様に

$$\mathcal{T}((z, p), (\zeta, \phi)) = \exp(-H(\zeta, \phi) + H(z, p))$$

も成り立つ。すると、

$$P(z, p) \mathcal{T}((z, p), (\zeta, \phi)) = \exp(-H(\zeta, \phi))$$

$$P(\zeta, \phi) \mathcal{T}((\zeta, \phi), (z, p)) = \exp(-H(z, p))$$



Hamiltonian は時間発展で不变な²。

$$p(z, p) \mathcal{T}((z, p), (\xi, \phi)) = p(\xi, \phi) \mathcal{T}((\xi, \phi), (z, p))$$

と詳細釣合の条件が成立し、 $p(z, p)$ はこの Markov 遷移の定常分布。

- 実際は T_ϵ を適用するかわりに leapfrog によるシミュレートを行っている。数値誤差のため Hamiltonian は完全に保存されるわけではない。

→ Metropolis 法での採択率

$$A((\xi, \phi), (z, p)) = \min(1, \frac{p(z, p)}{p(\xi, \phi)}) = \min(1, \exp(-H(z, p) + H(\xi, \phi)))$$

を利用する。数値誤差がある場合、leapfrog 法では $H(z, p) \approx H(\xi, \phi)$

となる²。採択率は 1 に近くなる！

Algo. (Hamiltonian Monte Carlo)

Input: $\tilde{p}(z)$, $\varepsilon > 0$, $L \in \mathbb{Z}_{>0}$, $N \in \mathbb{Z}_{>0}$

Output: Markov 遷移 $\{\tilde{z}^{(i)}\}_{i=1}^N$

1. $\tilde{z}^{(1)}$ をランダムに初期化；
2. for $i = 1, \dots, N-1$ do:
 3. $p \sim \mathcal{N}(p | 0, I_d)$; $u \sim \text{Unif}(0, 1)$;
 4. $(\tilde{z}^*, p^*) \leftarrow \text{leapfrog}_{\varepsilon, L}(\tilde{z}^{(i)}, p)$; $r \leftarrow \frac{p(\tilde{z}^*, p^*)}{p(\tilde{z}^{(i)}, p)}$;
 5. $\tilde{z}^{(i+1)} \leftarrow \tilde{z}^*$ if $u \leq \min(1, r)$ else $\tilde{z}^{(i)}$
 6. return $\{\tilde{z}^{(i)}\}_{i=1}^N$.

4.1.6.3 Langevin 動力学法.

- Langevin 動力学法 (Langevin dynamics method) :

$L = 1$ とし $\tau = HMC$.

leapfrog の式をまとめ、

$$\begin{aligned}\mathbb{Z}^{\tau+\frac{\varepsilon}{2}} &= \mathbb{Z}^\tau + \varepsilon \dot{\mathbb{P}}^{\tau+\frac{\varepsilon}{2}} = \mathbb{Z}^\tau + \varepsilon \left(\dot{\mathbb{P}}^\tau - \frac{\varepsilon}{2} \frac{\partial}{\partial \mathbb{Z}} \mathcal{U}(\mathbb{Z}) \Big|_{\mathbb{Z}=\mathbb{Z}^\tau} \right) \\ &= \mathbb{Z}^\tau - \frac{\varepsilon^2}{2} \frac{\partial}{\partial \mathbb{Z}} \mathcal{U}(\mathbb{Z}) \Big|_{\mathbb{Z}=\mathbb{Z}^\tau} + \varepsilon \dot{\mathbb{P}}^\tau.\end{aligned}$$

つまり \mathbb{Z}^* を計算する。 \mathbb{Z}^* がそのまま手取ってしまうことで計算を簡便にする。

- 「シランダムウォーク的な運動」がある。

4.1.7 Gibbsサンプリング

- 分布 $p(\mathbb{Z})$ から直接 \mathbb{Z} 全体をサンプリングすることは難しいとき、

$\mathbb{Z} = (\mathbb{Z}_1, \dots, \mathbb{Z}_M)$ と M 個の分布、次のように逐次的に
サンプリングする ($Gibbs$ サンプリング)
↑ Gibbs 分布からサンプリングするに使われた。

Algo. ($Gibbs$ サンプリング)

Input: $p(\mathbb{Z}) = p(\mathbb{Z}_1, \dots, \mathbb{Z}_n)$, $N \in \mathbb{Z}_>$

Output: サンプル $\{\mathbb{Z}^{(i)}\}_{i=1}^N$

1 $\mathbb{Z}^{(1)}$: ランダムに初期化；

2 for $i = 1, \dots, N-1$ do :

3 for $m = 1, \dots, M$ do :

$$4. \quad Z_m^{(i+1)} \sim p(Z_m | Z_1^{(i+1)}, \dots, Z_{m-1}^{(i+1)}, Z_{m+1}^{(i)}, \dots, Z_n^{(i)})$$

$$\text{return } \{(Z_1^{(i)}, \dots, Z_n^{(i)})\}_{i=1}^N$$

- ・サンプルを得たい変数の数が膨大なとき、複数の確率モデルしかなく組み合はった巨大な確率モデルによるサンプリングを利用するとよい。
- ・Gibbsサンプリングは、採択率が常に1のMetropolis法。

§4.2 最適化に基く推論手法

・サンプリング法

・確率的な近似.

✓ サンプルサイズを増やすば

厳密解に近づく

✗ 必要なサンプルサイズが不明.

✗ 計算コストが膨大.

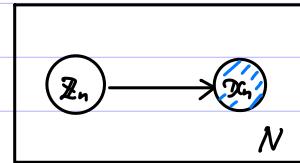
〈問題設定(再確認)〉

$\mathcal{X} = \{x_1, \dots, x_N\}$: 観測データ.

$\mathcal{Z} = \{z_1, \dots, z_N\}$: 潜在変数(非観測)

$p(\mathcal{X}, \mathcal{Z}) = p(\mathcal{X} | \mathcal{Z}) p(\mathcal{Z}) = \prod_{n=1}^N p(x_n | z_n) p(z_n)$: 確率モデル

$z_n \stackrel{i.i.d.}{\sim} p(z)$.



事後分布 $p(\mathcal{Z} | \mathcal{X})$ を求めたい.

4.2.1 变分推論法

・变分推論 (Variational Inference):

分布の集合 \mathcal{D} に属する分布のうち、分布 $p(\mathcal{Z})$ と“うまく近似する”分布 $q^*(\mathcal{Z})$ を

(何らかの) 变分問題 $q^*(\mathcal{Z}) = \underset{q \in \mathcal{D}}{\operatorname{argmin}} \mathcal{F}[q]$ を解くこととする手法。

$\mathcal{F}: \mathcal{D} \rightarrow \mathbb{R}$ と 汎函数 (functional) という。

Remark ふつうは後方問題を解く際に後方法を用いるが、ここで扱うものは

後方法を明示的に使わなくても解ける。

- 事後分布について。Bayesの定理より

$$p(\theta|x) = \frac{p(x|\theta)p(\theta)}{p(x)} = p(x,\theta)p(x)^{-1}$$

$$\Leftrightarrow \log p(\theta|x) = -\log p(x) + \log p(x,\theta).$$

$p(x,\theta)$ は確率モデル（これは自分で設定したものにならぬ）。しかし、

周辺尤度 $p(x) = \int p(x,\theta) d\theta$ は、モデルが複雑になると

解析的計算できない。

- θ についての適当な分布 $q(\theta)$ を考えよ

$$\log p(x) = \log p(x,\theta) - \log p(\theta|x)$$

の両辺 $q(\theta)$ について期待値 E とすると、

$$\int q(\theta) \log p(x) d\theta = \int q(\theta) \log p(x,\theta) d\theta - \int q(\theta) \log p(\theta|x) d\theta$$

$$(l.h.s.) = \log p(x) \underbrace{\int q(\theta) d\theta}_{=1} = \log p(x)$$

(r.h.s.)

$$= \int q(\theta) \log \frac{p(x,\theta)}{q(\theta)} \cdot \frac{q(\theta)}{p(\theta|x)} d\theta$$

$$= \mathbb{E}_{q(\theta)} \left[\log \frac{p(x,\theta)}{q(\theta)} \right] + \mathbb{E}_{q(\theta)} \left[\log \frac{q(\theta)}{p(\theta|x)} \right]$$

$$= \mathbb{E}_{q(\theta)} \left[\log \frac{p(x,\theta)}{q(\theta)} \right] + D_{KL}[q(\theta) \| p(\theta|x)].$$

$$\mathcal{L}[q] := \mathbb{E}_{q(\theta)} \left[\log \frac{p(x,\theta)}{q(\theta)} \right] \text{ となる}.$$

$$\log p(\mathbf{x}) = \mathcal{L}[q] + D_{KL}[q(\mathbf{z}) \| p(\mathbf{z}|\mathbf{x})] \quad \text{を得る.}$$

Kullback-Leibler divergence は非負なので、

$$\log p(\mathbf{x}) \geq \mathcal{L}[q].$$

$\mathcal{L}[q]$ は対数周辺尤度の下界を与える。これ

エビデンス下界 (evidence lower bound : ELBO), あるいは

変分下界 (variational lower bound) という。

$\log p(\mathbf{x})$ がまだなくて、 $\mathcal{L}[q]$ を最大化すること

$\log p(\mathbf{x})$ の (下界) より評価を得られる。

Remark • $\mathcal{F}[q] := -\mathcal{L}[q]$ を変分エネルギー (variational energy) という。

• $\mathcal{L}[q]$ の設計の仕方は他にもある。

c.) Rényi Lower Bound.

$$\begin{aligned} q^*(\mathbf{z}) &:= \underset{q}{\operatorname{argmax}} \mathcal{L}[q] \\ &= \underset{q}{\operatorname{argmax}} \left(\log p(\mathbf{x}) - D_{KL}[q(\mathbf{z}) \| p(\mathbf{z}|\mathbf{x})] \right) \\ &= \underset{q}{\operatorname{argmin}} D_{KL}[q(\mathbf{z}) \| p(\mathbf{z}|\mathbf{x})]. \end{aligned}$$

$\rightarrow q(\mathbf{z})$ が $p(\mathbf{z}|\mathbf{x})$ をうまく近似するように最適化している。

• $D_{KL}[q(\mathbf{z}) \| p(\mathbf{z}|\mathbf{x})] \geq 0$ で、等号成立は $q(\mathbf{z}) = p(\mathbf{z}|\mathbf{x})$ のとき。

$p(\mathbf{z}|\mathbf{x})$ は $p(\mathbf{x})$ のために求まらない場合の \mathbf{z} の分布。これでは意味がない...

\rightarrow 考えらる分布 q をある範囲 \mathcal{D} 上に制限してしまう。

- q を扱いやすい分布にてきるが、たまに表現力が制限されてしまうため、近似精度には限界がある。
- 制限の仕方。

1. $q \in \text{パラメトリックな分布 } q(\theta | \xi)$ は制限する。

• パラメータ ξ を変分パラメータ (variational parameter) と呼ぶ

→ このとき ELBO は ξ の函数 $L(\xi)$ になる。最適なパラメータ ξ^* を求める。

$$\xi^* = \underset{\xi}{\operatorname{argmax}} L(\xi)$$

と適当な最適化手法を用いて解けばいい。

2 平均場近似 (mean field approximation)。

$\boldsymbol{\theta} = (\theta_1, \dots, \theta_M)$ を M に分割して、独立性を仮定:

$$q(\boldsymbol{\theta}) = \prod_{i=1}^M q_i(\theta_i)$$

→ 各近似分布 $q_1(\theta_1), \dots, q_M(\theta_M)$ を順にそれぞれ最適化する

• $q_j(\theta_j)$ についての最適化をする他の $q_i(\theta_i)$ ($i \neq j$) は固定する。

$$\mathcal{L}[q]$$

$$= \mathbb{E}_{q(\boldsymbol{\theta})} \left[\log \frac{p(\mathbf{x}, \boldsymbol{\theta})}{q(\boldsymbol{\theta})} \right]$$

$$= \int q_j(\theta_j) \prod_{i \neq j} q_i(\theta_i) \left(\log p(\mathbf{x}, \boldsymbol{\theta}) - \sum_{i \neq j} \log q_i(\theta_i) - \log q_j(\theta_j) \right) d\boldsymbol{\theta}$$

$$= \int q_j(\theta_j) \left(\int \prod_{i \neq j} q_i(\theta_i) \log p(\mathbf{x}, \boldsymbol{\theta}) d\boldsymbol{\theta} \right) d\theta_j$$

$$- \sum_{i \neq j} \int q_i(\theta_i) \log q_i(\theta_i) d\theta_i - \int q_j(\theta_j) \log q_j(\theta_j) d\theta_j.$$

$$\text{左辺} = \int \prod_{i \neq j} q_i(\beta_i) \log p(x, \beta) d\beta_j =: \mathbb{E}_{\beta \neq j} [\log p(x, \beta)] \text{ と書く}.$$

$$\sum_{i \neq j} \int q_i(\beta_i) \log q_i(\beta_i) d\beta_i = \text{const.} \quad i \text{ 注意すると,}$$

$$\mathcal{L}[q] = \int q_j(\beta_j) \left(\mathbb{E}_{\beta \neq j} [\log p(x, \beta)] - \log q_j(\beta_j) \right) d\beta_j + \text{const.}$$

$$\text{左辺} = \log \tilde{p}(x, \beta_j) = \mathbb{E}_{\beta \neq j} [\log p(x, \beta)] + \text{const.} \text{ となる分布 } \tilde{p}(x, \beta_j)$$

を考える. すると,

$$\mathcal{L}[q] = - \int q_j(\beta_j) \log \frac{q_j(\beta_j)}{\tilde{p}(x, \beta_j)} d\beta_j + \text{const.}$$

$$= - D_{KL}[q_j(\beta_j) \| \tilde{p}(x, \beta_j)] + \text{const.}$$

左辺.

$$q_j^*(\beta_j)$$

$$= \underset{q_j}{\operatorname{argmax}} \mathcal{L}[q]$$

$$= \underset{q_j}{\operatorname{argmin}} D_{KL}[q_j(\beta_j) \| \tilde{p}(x, \beta_j)] \quad \leftarrow \begin{array}{l} \text{一般に } z = z' \text{ の方法で便りこども最適解を求める.} \\ z = z' \text{ は KL divergence の最小化問題で簡単.} \end{array}$$

$$= \tilde{p}(x, \beta_j)$$

$$\propto \exp(\mathbb{E}_{\beta \neq j} [\log p(x, \beta)]).$$

$q_j^*(\beta_j)$ の分布は $i \neq j$ なる β_i は、正規化定数を計算すると、

$$q_j^*(\beta_j) = \frac{\exp(\mathbb{E}_{\beta \neq j} [\log p(x, \beta)])}{\int \exp(\mathbb{E}_{\beta \neq j} [\log p(x, \beta)]) d\beta_j}.$$

座標降下法.

→ 全ての因子 $q_i(\beta_i)$ を適当に初期化して、各 $q_i(\beta_i)$ を上式で逐次最適化する。

$\mathcal{L}[q]$ は各 q_i は閉じて凸なので、このスキームで q_i^* は収束する。

Remark $\mathcal{L}[q]$

$$\begin{aligned}
 &= \int q(\gamma) \log \frac{p(x, \gamma)}{q(\gamma)} d\gamma \\
 &= \int q(\gamma) \left(\log p(x|\gamma) + \log \frac{p(\gamma)}{q(\gamma)} \right) d\gamma \\
 &= \mathbb{E}_{q(\gamma)} [\log p(x|\gamma)] - D_{KL}[q(\gamma) \| p(\gamma)]
 \end{aligned}$$

$\mathcal{L}[q] \rightarrow \max$ となるとき

第1項：観測データの対数尤度の q による期待値

→ なるべく大きくなる。

$\log p(x|\gamma)$ を最大にする $\gamma = \hat{\gamma}$ とし、 $q(\gamma) = \delta(\gamma - \hat{\gamma})$ (デルタ分布) のとき最大

第2項： q が p に対する KL-divergence.

→ なるべく小さくなる。

q が p から大きく離れて分布になると「防ぐ」。(正則化の効果)

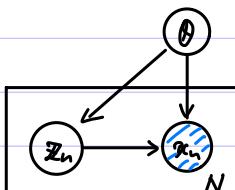
変分推論により得られる q^*_γ 、2項のバランスのとれた解にならせる。

- 変分EMアルゴリズム (variational expectation maximization algo.)

- 潜在変数 $\gamma = \{z_1, \dots, z_N\}$ の他に、パラメータ θ も存在する

状況を考える。

- γ ：データ数が増えるにつれ次元が増える (外延的)
- θ ：固定次元 (内延的)
- モデル： $p(x, \gamma, \theta) = p(x|\gamma, \theta)p(\gamma|\theta)p(\theta)$



- ・**後分EMアルゴリズム**では、

$$p(\gamma, \theta) = p(\gamma|\theta)p(\theta) \approx q(\gamma, \theta) = q(\gamma)q(\theta)$$

と平均場近似として後分推論を行う。

- ・**後分E-step**：パラメータの近似分布 $q(\theta)$ を固定し、

潜在変数の近似分布 $q(\gamma)$ を更新する。

$$q_r^*(\gamma) = \frac{\exp(\mathbb{E}_{q(\theta)}[\log p(x, \gamma, \theta)])}{\int \exp(\mathbb{E}_{q(\theta)}[\log p(x, \gamma, \theta)]) d\gamma}.$$

ここで、

$$\begin{aligned} & \exp(\mathbb{E}_{q(\theta)}[\log p(x, \gamma, \theta)]) \\ &= \exp(\mathbb{E}_{q(\theta)}[\log p(x, \gamma|\theta) + \log p(\theta)]) \quad \text{（γは依存する)} \\ &= \exp(\mathbb{E}_{q(\theta)}[\log p(x, \gamma|\theta)]) \underbrace{\exp(\mathbb{E}_{q(\theta)}[\log p(\theta)])}_{\text{（θは独立）}} \end{aligned}$$

となる。

$$\begin{aligned} & \int \exp(\mathbb{E}_{q(\theta)}[\log p(x, \gamma|\theta)]) d\gamma \\ &= \exp(\mathbb{E}_{q(\theta)}[\log p(\theta)]) \int \exp(\mathbb{E}_{q(\theta)}[\log p(x, \gamma|\theta)]) d\gamma. \end{aligned}$$

結局、

$$q_r^*(\gamma) = \frac{\exp(\mathbb{E}_{q(\theta)}[\log p(x, \gamma|\theta)])}{\int \exp(\mathbb{E}_{q(\theta)}[\log p(x, \gamma|\theta)]) d\gamma}.$$

と更新する。

• **後方 M-step**: 潜在変数の近似分布 $q(\gamma)$ を固定し、

パラメータの近似分布 $q(\theta)$ を更新する。

$$q^*(\theta) = \frac{\exp(\mathbb{E}_{q(\gamma)}[\log p(x, \gamma, \theta)])}{\int \exp(\mathbb{E}_{q(\gamma)}[\log p(x, \gamma, \theta)]) d\theta}$$

先と同様に、

$$\begin{aligned} & \exp(\mathbb{E}_{q(\gamma)}[\log p(x, \gamma, \theta)]) \\ &= \exp(\mathbb{E}_{q(\gamma)}[\log p(x, \gamma | \theta)]) \exp(\mathbb{E}_{q(\gamma)}[\log p(\theta)]) \\ &= \exp(\mathbb{E}_{q(\gamma)}[\log p(x, \gamma | \theta)]) \exp(\log p(\theta)) \\ &= p(\theta) \exp(\mathbb{E}_{q(\gamma)}[\log p(x, \gamma | \theta)]). \end{aligned}$$

γ は依存ない

したがって

$$q^*(\theta) = \frac{p(\theta) \exp(\mathbb{E}_{q(\gamma)}[\log p(x, \gamma | \theta)])}{\int p(\theta) \exp(\mathbb{E}_{q(\gamma)}[\log p(x, \gamma | \theta)]) d\theta}$$

と更新する。

cf.) (通常の) EMアルゴリズム。

θ は事前分布を設定しない

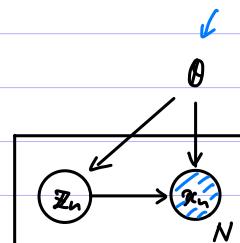
$$\text{モデル: } p(x, \gamma; \theta) = p(x | \gamma; \theta) p(\gamma; \theta).$$

θ はパラメータ。

θ は尤度、対数尤度

$$\log p(x; \theta) = \log \int p(x, \gamma; \theta) d\gamma$$

を最大化する (θ の最大推定)。



$\{z\}_{i=1}^n$ の適当な分布 $q(z)$ を考えると、

$$\begin{aligned}
 \log p(x; \theta) &= \log p(x; \theta) \int q(z) dz \\
 &= \int q(z) \log p(x; \theta) dz \\
 &= \int q(z) \log \frac{p(x, z; \theta)}{p(z|x; \theta)} dz \\
 &= \int q(z) \log \frac{p(x, z; \theta)}{q(z)} dz + \int q(z) \log \frac{q(z)}{p(z|x; \theta)} dz \\
 &= \int q(z) \log \frac{p(x, z; \theta)}{q(z)} dz + D_{KL}[q(z) \| p(z|x; \theta)].
 \end{aligned}$$

$$\therefore \mathcal{L}_\theta[q] := \int q(z) \log \frac{p(x, z; \theta)}{q(z)} dz \text{ とおいた}.$$

$$\begin{aligned}
 \log p(x; \theta) &= \mathcal{L}_\theta[q] + \underline{D_{KL}[q(z) \| p(z|x; \theta)]} \\
 &\geq \mathcal{L}_\theta[q].
 \end{aligned}$$

下界 $\mathcal{L}_\theta[q]$ を θ に関する最大化することで尤度を最大化する θ を求めよ。

このためには、 q と θ が互いに最適化していく。

- E-step : θ を固定して $q(z)$ を更新する。

$$\mathcal{L}_\theta[q] = \underbrace{\log p(x; \theta)}_{q \text{ は仮定}} - D_{KL}[q(z) \| p(z|x; \theta)] \text{ とおいた}.$$

$$\begin{aligned}
 q^*(z) &= \operatorname{argmax}_{q(z)} \mathcal{L}_\theta[q] \\
 &= \operatorname{argmin}_{q(z)} D_{KL}[q(z) \| p(z|x; \theta)] \\
 &= p(z|x; \theta). \quad (\text{Zの事後分布})
 \end{aligned}$$

このとき、

この期待値をとるためのステップをE-step。

$$L[q^*] = \int q^*(z) \log p(x, z; \theta) dz - \int q^*(z) \log q^*(z) dz = \mathbb{E}_{q^*(z)}[\log p(x, z; \theta)] + \text{const}$$

・ M-step : $q(\gamma)$ を固定して θ を更新する.

$$\begin{aligned}\theta^* &= \underset{\theta}{\operatorname{argmax}} \mathcal{L}_{\theta}[q] \\ &= \underset{\theta}{\operatorname{argmax}} \int q(\gamma) \log p(x, \gamma; \theta) d\gamma \\ &= \underset{\theta}{\operatorname{argmax}} \mathbb{E}_{q(\gamma)}[\log p(x, \gamma; \theta)].\end{aligned}$$

$\leftarrow \theta$ について最大化するステップを M-step.
最大化している.

・ 以上の E-step, M-step で $\mathcal{L}_{\theta}[q]$ が減少することはない.

E-step を行う前のパラメータを θ^{old} とする.

E-step 終了後の $q \in q_p^{new}$ とすると, $\mathcal{L}_{\theta^{old}}[q_p^{new}] = \log p(x; \theta^{old})$ が成立.

M-step 終了後のパラメータを θ^{new} とすると, $q_p^{new}(\gamma) = p(\gamma | x; \theta^{old})$ となる

$$\begin{aligned}\log p(x; \theta^{new}) &= \mathcal{L}_{\theta^{new}}[q_p^{new}] + D_{KL}[q_p^{new}(\gamma) \| p(\gamma | x; \theta^{new})] \\ &\geq \mathcal{L}_{\theta^{old}}[q_p^{new}] + D_{KL}[q_p^{new}(\gamma) \| p(\gamma | x; \theta^{new})] \\ &= (\log p(x; \theta^{old}) + D_{KL}[q_p^{new}(\gamma) \| p(\gamma | x; \theta^{new})]). \\ &= (\log p(x; \theta^{old}) + D_{KL}[p(\gamma | x; \theta^{old}) \| p(\gamma | x; \theta^{new})]). \\ &\geq \log p(x; \theta^{old}).\end{aligned}$$

M-step で
 θ について最大化
される
 $\mathcal{L}_{\theta^{new}}[q] \geq \mathcal{L}_{\theta^{old}}[q]$
が成り立つ

よって EM algo. 1 ステップで 対数尤度は増加する.

$\theta^{new} = \theta^{old}$ のとき, またはときに限り 等号成立.

対数尤度が収束したときのパラメータ θ が 最大推定量となる.

4.2.2 例：平均場近似による潜在変数モデルの学習

- 潜在変数モデル (latent variable model) による次元削減を扱う。

$\mathcal{X} = \{x_1, \dots, x_N\} \subseteq \mathbb{R}^d$: 観測データ

$\mathcal{Z} = \{z_1, \dots, z_N\} \subseteq \mathbb{R}^l$: 潜在変数 ($l \ll d$)

$x_i \in \mathbb{R}^d$ を表現して、 \mathcal{Z} の圧縮、可視化、特徴量抽出などを行う。

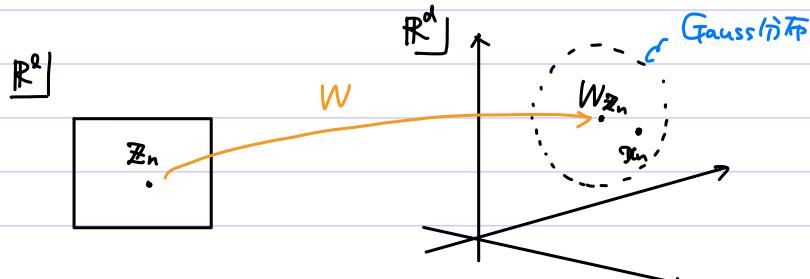
- PCA, ICA, 行列分解, k-means など多くのモデルで表現できる。

4.2.2.1 線形次元削減への適用

- 仮定。

$W \in M_{d,l}(\mathbb{R})$ はランダム, $\sigma_x^2 > 0$ は定数とし

$$p(\mathcal{X} | \mathcal{Z}, W) = \prod_{n=1}^N p(x_n | z_n, W) = \prod_{n=1}^N \mathcal{N}(x_n | W z_n, \sigma_x^2 I_d)$$



\mathcal{Z} の事前分布: $p(\mathcal{Z}) = \prod_{n=1}^N \mathcal{N}(z_n | 0, I_l)$

W の事前分布:

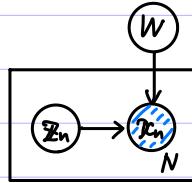
$$W = \begin{pmatrix} w_1^T \\ \vdots \\ w_d^T \end{pmatrix} \quad (w_j \in \mathbb{R}^l), \quad \sigma_w^2 > 0 \text{ : 定数} \quad \text{とし}.$$

$$p(W) = \prod_{j=1}^d \mathcal{N}(w_j | 0, \sigma_w^2 I_l).$$

- モテル:

$$p(x, z, w) = p(x|z, w)p(z, w)$$

$$= p(x|z, w)p(z)p(w).$$



- 事後分布 $p(z, w|x)$ を次で近似:

$$p(z, w|x) \approx q(z)q(w).$$

変分推論(変分EM algo.)を行.

i 回目の更新後の近似分布を $q_i(z)$, $q_i(w)$ と書く.

- 変分E-step. z の近似分布を更新.

$$q_{i+1}(z) \propto \exp(\mathbb{E}_{q_i(w)}[\log p(x, z|w)]).$$

$w_i = \text{既定} z_n$

$$= \exp(\mathbb{E}_{q_i(w)}[\log p(x|z, w)] + \mathbb{E}_{q_i(w)}[\log p(z)])$$

$$= \exp(\mathbb{E}_{q_i(w)}[\log p(x|z, w)]) \exp(\log p(z))$$

$$= p(z) \exp(\mathbb{E}_{q_i(w)}[\log p(x|z, w)]).$$

- 変分M-step. w の近似分布を更新.

$$q_{i+1}(w) \propto p(w) \exp(\mathbb{E}_{q_{i+1}(z)}[\log p(x, z|w)])$$

$$\propto p(w) \exp(\mathbb{E}_{q_{i+1}(z)}[\log p(x|z, w)]).$$

- 各stepの計算をもう少し進める.

$$\log p(x|z, w)$$

$$= \log \left(\prod_{n=1}^N \mathcal{N}(x_n | W z_n, \sigma_x^2 I_d) \right)$$

$$\begin{aligned}
&= \sum_{n=1}^N \log \mathcal{N}(x_n | W z_n, \sigma_x^2 I_d) \quad \text{スム, } W \text{ は依存しない項は} \\
&\quad \text{const. にまとめます.} \\
&= \sum_{n=1}^N \left(-\frac{1}{2\sigma_x^2} (x_n - W z_n)^T (x_n - W z_n) \right) + \text{const.} \\
&= -\frac{1}{2\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \left(\cancel{x_n^T x_n} - \cancel{x_n^T W z_n} - \cancel{z_n^T W^T x_n} + \cancel{z_n^T W^T W z_n} \right) + \text{const.} \\
&= -\frac{1}{2\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \left(\cancel{z_n^T W^T W z_n} - 2 \cancel{x_n^T W z_n} \right) + \text{const.} \\
&\quad \text{スム-ツジで転置とでも同じ.} \\
&\Rightarrow \sum_{n=1}^N z_n^T W^T W z_n \quad \text{スム-ツジで転置とでも同じ.}
\end{aligned}$$

$$\mathbb{E}_{q_i(W)} [\log p(\mathbf{x} | \mathbf{z}, \mathbf{W})]$$

$$\begin{aligned}
&= -\frac{1}{2\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \left(\cancel{z_n^T} \mathbb{E}_{q_i(W)} [W^T W] z_n - 2 \cancel{z_n^T} \mathbb{E}_{q_i(W)} [W]^T x_n \right) + \text{const.} \\
&= -\frac{1}{2\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \left(\cancel{z_n^T} \left(\sum_{j=1}^d \mathbb{E}_{q_i(W)} [w_j w_j^T] \right) z_n - 2 \cancel{z_n^T} \left(\sum_{j=1}^d x_{n,j} \mathbb{E}_{q_i(W)} [w_j] \right) \right) + \text{const.}
\end{aligned}$$

$$\mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} [\log p(\mathbf{x} | \mathbf{z}, \mathbf{W})]$$

$$\begin{aligned}
&= -\frac{1}{2\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \left(\mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} [\cancel{z_n^T W^T W z_n}] - 2 \cancel{x_n^T W} \mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} [z_n] \right) + \text{const.} \\
&\quad \text{スム-ツジで転置} \\
&= -\frac{1}{2\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \left(\mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} [\text{tr}(\cancel{z_n^T W^T W z_n})] - 2 \cancel{x_n^T W} \mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} [z_n] \right) + \text{const.} \\
&\quad \text{tr-(AB)=tr(BA)} \\
&= -\frac{1}{2\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \left(\mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} [\text{tr}(\cancel{W z_n z_n^T W^T})] - 2 \cancel{x_n^T W} \mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} [z_n] \right) + \text{const.} \\
&\quad \text{trの計算} \\
&= -\frac{1}{2\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \left(\mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} \left[\sum_{j=1}^d w_j^T z_n z_n^T w_j \right] - 2 \cancel{x_n^T W} \mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} [z_n] \right) + \text{const.} \\
&= -\frac{1}{2\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \left(\sum_{j=1}^d w_j^T \mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} [z_n z_n^T] w_j - 2 \cancel{x_n^T W} \mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} [z_n] \right) + \text{const.} \\
&\quad \text{スム-ツジで転置} \\
&= -\frac{1}{2\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \left(\sum_{j=1}^d w_j^T \mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} [z_n z_n^T] w_j - 2 \mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} [z_n]^T W^T x_n \right) + \text{const.} \\
&= -\frac{1}{2\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \left(\sum_{j=1}^d w_j^T \mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} [\cancel{z_n z_n^T}] w_j - 2 \mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} [z_n]^T \left(\sum_{j=1}^d x_{n,j} w_j \right) \right) + \text{const.} \\
&= -\frac{1}{2\sigma_x^2} \sum_{j=1}^d \sum_{n=1}^N \left(w_j^T \mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} [\cancel{z_n z_n^T}] w_j - 2 x_{n,j} \mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} [z_n]^T w_j \right) + \text{const.} \\
&= -\frac{1}{2\sigma_x^2} \sum_{j=1}^d \left(w_j^T \left(\sum_{n=1}^N \mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} [\cancel{z_n z_n^T}] \right) w_j - 2 w_j^T \left(\sum_{n=1}^N x_{n,j} \mathbb{E}_{q_{in}(\mathbf{q})} [z_n] \right) \right) + \text{const.}
\end{aligned}$$

1段目 E-step での更新は、

$$\log q_{\theta^{t+1}}(\boldsymbol{\theta})$$

$$= \log p(\boldsymbol{\theta}) + \mathbb{E}_{q_i(w)} [\log p(\mathbf{x} | \boldsymbol{\theta}, w)] + \text{const.}$$

$$= -\frac{1}{2} \sum_{n=1}^N \mathbf{z}_n^\top \mathbf{z}_n - \frac{1}{2\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \left(\mathbf{z}_n^\top \left(\sum_{j=1}^d \mathbb{E}_{q_i(w)} [w_j w_j^\top] \right) \mathbf{z}_n - 2 \mathbf{z}_n^\top \left(\sum_{j=1}^d \alpha_{n,j} \mathbb{E}_{q_i(w)} [w_j] \right) \right)$$

+ const.

$$= -\frac{1}{2} \sum_{n=1}^N \left(\mathbf{z}_n^\top \left(\mathbf{I}_d + \frac{1}{\sigma_x^2} \sum_{j=1}^d \mathbb{E}_{q_i(w)} [w_j w_j^\top] \right) \mathbf{z}_n - 2 \mathbf{z}_n^\top \left(\frac{1}{\sigma_x^2} \sum_{j=1}^d \alpha_{n,j} \mathbb{E}_{q_i(w)} [w_j] \right) \right) + \text{const}$$

$$= -\frac{1}{2} \sum_{n=1}^N \left(\mathbf{z}_n^\top \hat{\Sigma}_{z,z+1}^{-1} \mathbf{z}_n - 2 \mathbf{z}_n^\top \hat{\mu}_{z,z+1} \right) + \text{const}$$

$$= \sum_{n=1}^N \log \mathcal{N}(\mathbf{z}_n | \hat{\mu}_{z,z+1}, \hat{\Sigma}_{z,z+1})$$

$$\Rightarrow \text{よし}, \quad q_{\theta^{t+1}}(\boldsymbol{\theta}) = \prod_{n=1}^N \mathcal{N}(\mathbf{z}_n | \hat{\mu}_{z,z+1}, \hat{\Sigma}_{z,z+1}).$$

右辺に各 \mathbf{z}_n の分布の積の形なので、 $q_{\theta^{t+1}}(\boldsymbol{\theta}) = \prod_{n=1}^N q_{\theta^{t+1}}(\mathbf{z}_n)$ と独立な形！

よしで、各 $n = 1, \dots, N$ に $\hat{\mu}_{z,z+1}$

$$q_{\theta^{t+1}}(\mathbf{z}_n) = \mathcal{N}(\mathbf{z}_n | \hat{\mu}_{z,z+1}, \hat{\Sigma}_{z,z+1}),$$

$$\hat{\mu}_{z,z+1} = \frac{1}{\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \sum_{j=1}^d \alpha_{n,j} \mathbb{E}_{q_i(w)} [w_j],$$

$$\hat{\Sigma}_{z,z+1} = \left(\mathbf{I}_d + \frac{1}{\sigma_x^2} \sum_{j=1}^d \mathbb{E}_{q_i(w)} [w_j w_j^\top] \right)^{-1}$$

と更新すればよい。

$\mathbb{E}_{q_i(w)} [w_j]$ と $\mathbb{E}_{q_i(w)} [w_j w_j^\top]$ は 1.1.2. で、次の段階 M-step の結果以降

計算する。

次に M-step での更新は

$$\log q_{\hat{p}_{i+1}}(w)$$

$$= \log p(w) + \mathbb{E}_{q_{\hat{p}_{i+1}}(g)}[\log p(x|g, w)] + \text{const.}$$

$$= -\frac{1}{2} \sum_{j=1}^d \frac{1}{\sigma_w^2} w_j^\top w_j - \frac{1}{2} \sum_{j=1}^d \left(w_j^\top \left(\frac{1}{\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \mathbb{E}_{q_{\hat{p}_{i+1}}(g)}[z_n z_n^\top] \right) w_j - 2 w_j^\top \left(\frac{1}{\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N x_{n,j} \mathbb{E}_{q_{\hat{p}_{i+1}}(g)}[z_n] \right) \right) + \text{const.}$$

$$= -\frac{1}{2} \sum_{j=1}^d \left(w_j^\top \left(\frac{1}{\sigma_w^2} I_d + \frac{1}{\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \mathbb{E}_{q_{\hat{p}_{i+1}}(g)}[z_n z_n^\top] \right) w_j - 2 w_j^\top \left(\frac{1}{\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N x_{n,j} \mathbb{E}_{q_{\hat{p}_{i+1}}(g)}[z_n] \right) \right) + \text{const.}$$

$\hat{\Sigma}_{w,i+1}^{-1}$

$\hat{\Sigma}_{w,i+1}^{-1} \hat{\mu}_{w,j,i+1}$

$$= -\frac{1}{2} \sum_{j=1}^d \left(w_j^\top \hat{\Sigma}_{w,i+1}^{-1} w_j - 2 w_j^\top \hat{\Sigma}_{w,i+1}^{-1} \hat{\mu}_{w,j,i+1} \right) + \text{const.}$$

$$= \sum_{j=1}^d \log \mathcal{N}(w_j | \hat{\mu}_{w,j,i+1}, \hat{\Sigma}_{w,i+1})$$

$$\text{つまり, } q_{\hat{p}_{i+1}}(w) = \prod_{j=1}^d \mathcal{N}(w_j | \hat{\mu}_{w,j,i+1}, \hat{\Sigma}_{w,i+1})$$

右辺は各 w_j の分布の積の形に似て、 $q_{\hat{p}_{i+1}}(w) = \prod_{j=1}^d q_{\hat{p}_{i+1}}(w_j)$ と独立な形に

見て、各 $j = 1, \dots, d$

$$q_{\hat{p}_{i+1}}(w_j) = \mathcal{N}(w_j | \hat{\mu}_{w,j,i+1}, \hat{\Sigma}_{w,i+1})$$

$$\hat{\mu}_{w,j,i+1} = \frac{1}{\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N x_{n,j} \mathbb{E}_{q_{\hat{p}_{i+1}}(g)}[z_n]$$

$$\hat{\Sigma}_{w,i+1} = \left(\frac{1}{\sigma_w^2} I_d + \frac{1}{\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \mathbb{E}_{q_{\hat{p}_{i+1}}(g)}[z_n z_n^\top] \right)^{-1}$$

と更新すればよい。

結局、 $q_{\hat{p}_i}(z_n)$ も $q_{\hat{p}_i}(w_j)$ も Gauss 分布なので、期待値を計算でき。

$$\mathbb{E}_{q_{\hat{p}_i}(w)}[w_j] = \mathbb{E}_{q_{\hat{p}_i}(w_j)}[w_j] = \hat{\mu}_{w,j,i}$$

$$\mathbb{E}_{q_{\hat{p}_i}(w)}[w_j w_j^\top] = \mathbb{E}_{q_{\hat{p}_i}(w_j)}[w_j w_j^\top] = \hat{\Sigma}_{w,i} + \hat{\mu}_{w,j,i} \hat{\mu}_{w,j,i}^\top$$

$$\mathbb{E}_{q_{z|z}(q)}[z_n] = \mathbb{E}_{q_{z|z}(z_n)}[z_n] = \hat{\mu}_{z_n, i+1},$$

$$\mathbb{E}_{q_{z|z}(q)}[z_n z_n^T] = \mathbb{E}_{q_{z|z}(z_n)}[z_n z_n^T] = \hat{\Sigma}_{z, i+1} + \hat{\mu}_{z_n, i+1} \hat{\mu}_{z_n, i+1}^T.$$

最終的に、以下のように Gauss 分布のパラメータを更新すればよいことが分かる：

[後方 E-step]

$$\hat{\Sigma}_{z, i+1} = \left(I_d + \frac{d}{\sigma_x^2} \hat{\Sigma}_{w, i} + \frac{1}{\sigma_x^2} \sum_{j=1}^d \hat{\mu}_{w_j, i} \hat{\mu}_{w_j, i}^T \right)^{-1},$$

$$\hat{\mu}_{z_n, i+1} = \frac{1}{\sigma_x^2} \hat{\Sigma}_{z, i+1} \sum_{j=1}^d Q_{n,j} \hat{\mu}_{w_j, i}.$$

[後方 M-step]

$$\hat{\Sigma}_{w, i+1} = \left(\frac{1}{\sigma_w^2} I_d + \frac{N}{\sigma_x^2} \hat{\Sigma}_{z, i+1} + \frac{1}{\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \hat{\mu}_{z_n, i+1} \hat{\mu}_{z_n, i+1}^T \right)^{-1},$$

$$\hat{\mu}_{w_j, i+1} = \frac{1}{\sigma_w^2} \hat{\Sigma}_{w, i+1} \sum_{n=1}^N x_{n,j} \hat{\mu}_{z_n, i+1}.$$

4.2.2.2 混合 Gauss 分布への適用

- 連續な潜在変数 θ の代わりに、離散の潜在変数

$$\mathcal{S} = \{s_1, \dots, s_N\} \subseteq \{0, 1\}^K, \quad \sum_{k=1}^K s_{n,k} = 1 \quad (n=1, \dots, N)$$

を割り当てることで、クラスタリングが実現される。

- 仮定

$W = (w_1, \dots, w_K) \in M_{d,K}(\mathbb{R})$ ($w_j \in \mathbb{R}^d$) はパラメータ $, \sigma_x^2 > 0$ を定数として、

$$p(x | \mathcal{S}, W) = \prod_{n=1}^N p(x_n | s_n, W) = \prod_{n=1}^N \mathcal{N}(x_n | W s_n, \sigma_x^2 I_d).$$

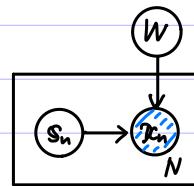
\mathcal{S} の事前分布： $p(\mathcal{S}) = \prod_{n=1}^N \text{Cat}(s_n | \pi)$ (π ：定ベクトル)

W の事前分布： $\sigma_w^2 > 0$ とし $p(W) = \prod_{k=1}^K \mathcal{N}(w_k | 0, \sigma_w^2 I_d)$.

- モテル:

$$p(x, s, w) = p(x|s, w)p(s, w)$$

$$= p(x|s, w)p(s)p(w)$$



- 事後分布 $p(s, w|x)$ を次で近似:

$$p(s, w|x) \approx q(s)q(w).$$

変分推論 (変分EM algo.) を行う。

i 回目の更新後の近似分布を $q_i(s)$, $q_i(w)$ と書く。

- 変分E-step. s の近似分布を更新。

$$q_{i+1}(s) \propto \exp(\mathbb{E}_{q_i(w)}[\log p(x, s|w)])$$

$$= p(s) \exp(\mathbb{E}_{q_i(w)}[\log p(x|s, w)])$$

- 変分M-step. w の近似分布を更新。

$$q_{i+1}(w) \propto p(w) \exp(\mathbb{E}_{q_{i+1}(s)}[\log p(x, s|w)])$$

$$\propto p(w) \exp(\mathbb{E}_{q_{i+1}(s)}[\log p(x|s, w)])$$

- 各stepの計算をもう少し進める。

$$\log p(x|s, w)$$

$$= -\frac{1}{2} \sum_{n=1}^N \left(\frac{1}{\sigma_x^2} s_n^\top W^\top W s_n - \frac{2}{\sigma_x^2} g_n^\top W s_n \right) + \text{const.}$$

$$= -\frac{1}{2} \sum_{n=1}^N \left(\frac{1}{\sigma_x^2} \left(\sum_{k=1}^K S_{n,k} w_k \right)^\top \left(\sum_{k=1}^K S_{n,k} w_k \right) - \frac{2}{\sigma_x^2} g_n^\top \left(\sum_{k=1}^K S_{n,k} w_k \right) \right) + \text{const.}$$

$$= -\frac{1}{2} \sum_{n=1}^N \left(\frac{1}{\sigma_x^2} \sum_{k=1}^K S_{n,k} w_k^\top w_k - \frac{2}{\sigma_x^2} g_n^\top \left(\sum_{k=1}^K S_{n,k} w_k \right) \right) + \text{const}$$

$$\downarrow S_{n,k} S_{n,k'} = \begin{cases} 0 & (k \neq k') \\ S_{n,k} & (k = k) \end{cases}$$

$$= -\frac{1}{2} \sum_{n=1}^N \sum_{k=1}^K \left(\frac{1}{\sigma_x^2} S_{n,k} w_k^\top w_k - \frac{2}{\sigma_x^2} S_{n,k} q_n^\top w_k \right) + \text{const}$$

∴ 2.

$$\mathbb{E}_{q_i(w)} [\log p(\chi | \delta, w)]$$

$$= -\frac{1}{2} \sum_{n=1}^N \sum_{k=1}^K \left(\frac{1}{\sigma_x^2} S_{n,k} \mathbb{E}_{q_i(w)} [w_k^\top w_k] - \frac{2}{\sigma_x^2} S_{n,k} q_n^\top \mathbb{E}_{q_i(w)} [w_k] \right) + \text{const.}$$

$$\mathbb{E}_{q_{i+1}(\delta)} [\log p(\chi | \delta, w)]$$

$$= -\frac{1}{2} \sum_{n=1}^N \sum_{k=1}^K \left(\frac{1}{\sigma_x^2} \mathbb{E}_{q_{i+1}(\delta)} [S_{n,k}] w_k^\top w_k - \frac{2}{\sigma_x^2} \mathbb{E}_{q_{i+1}(\delta)} [S_{n,k}] q_n^\top w_k \right) + \text{const}$$

∴ 1) E-Step 2) J,

$$\log q_{i+1}(\delta)$$

$$= \log p(\delta) + \mathbb{E}_{q_i(w)} [\log p(\chi | \delta, w)] + \text{const.}$$

$$= \sum_{n=1}^N \log \text{Cat}(S_n | \pi) - \frac{1}{2} \sum_{n=1}^N \sum_{k=1}^K \left(\frac{1}{\sigma_x^2} S_{n,k} \mathbb{E}_{q_i(w)} [w_k^\top w_k] - \frac{2}{\sigma_x^2} S_{n,k} q_n^\top \mathbb{E}_{q_i(w)} [w_k] \right)$$

+ const.

$$= \sum_{n=1}^N \sum_{k=1}^K S_{n,k} \left(\log \hat{\pi}_k - \frac{1}{2\sigma_x^2} \mathbb{E}_{q_i(w)} [w_k^\top w_k] + \frac{1}{\sigma_x^2} q_n^\top \mathbb{E}_{q_i(w)} [w_k] \right) + \text{const.}$$

$\stackrel{\text{def}}{=} \log \alpha_{n,k,i+1}$

$$= \sum_{n=1}^N \sum_{k=1}^K S_{n,k} \log \alpha_{n,k,i+1} + \text{const}$$

$$\hat{\pi}_{n,k,i+1} := \frac{\alpha_{n,k,i+1}}{\sum_{k'=1}^K \alpha_{n,k',i+1}}, \quad \hat{\pi}_{n,i+1} := \begin{pmatrix} \hat{\pi}_{n,1,i+1} \\ \vdots \\ \hat{\pi}_{n,K,i+1} \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^K$$

$$\log q_{i+1}(\delta) = \sum_{n=1}^N \log \text{Cat}(S_n | \hat{\pi}_{n,i+1}) \Leftrightarrow q_{i+1}(\delta) = \prod_{n=1}^N \text{Cat}(S_n | \hat{\pi}_{n,i+1}).$$

右辺は各 S_n の分布の積の形で表され、 $q_{i+1}(\delta) = \prod_{n=1}^N q_{i+1}(S_n)$ と独立な形で表される。

各 S_n ($n = 1, \dots, N$) は独立。

$$\begin{aligned}\alpha_{n,k,m} &= \exp \left(\log \pi_k - \frac{1}{2\sigma_x^2} \mathbb{E}_{q_i(w)} [w_k^\top w_k] + \frac{1}{\sigma_x^2} q_m^\top \mathbb{E}_{q_i(w)} [w_k] \right) \\ &= \pi_k \exp \left(-\frac{1}{2\sigma_x^2} \mathbb{E}_{q_i(w)} [w_k^\top w_k] + \frac{1}{\sigma_x^2} q_m^\top \mathbb{E}_{q_i(w)} [w_k] \right) \quad (k=1, \dots, K)\end{aligned}$$

$$\hat{\pi}_{n,k,m} = \frac{\alpha_{n,k,m}}{\sum_{k=1}^K \alpha_{n,k,m}} \quad (k=1, \dots, K), \quad \hat{\pi}_{n,m} = \begin{pmatrix} \hat{\pi}_{n,1,m} \\ \vdots \\ \hat{\pi}_{n,K,m} \end{pmatrix},$$

$$q_{i+1}(s_n) = \text{Cat}(s_n | \hat{\pi}_{n,m})$$

と更新され、 $\hat{\pi}_{n,m}$ 。

次回 M-Step で、

$$\log q_{i+1}(w)$$

$$= \log p(w) + \mathbb{E}_{q_{i+1}(w)} [\log p(x | \delta, w)] + \text{const.}$$

$$= -\frac{1}{2\sigma_w^2} \sum_{k=1}^K w_k^\top w_k - \frac{1}{2} \sum_{n=1}^N \sum_{k=1}^K \left(\frac{1}{\sigma_x^2} \mathbb{E}_{q_{i+1}(w)} [s_{n,k}] w_k^\top w_k - \frac{2}{\sigma_x^2} \mathbb{E}_{q_{i+1}(w)} [s_{n,k}] q_m^\top w_k \right)$$

+ const

$$= -\frac{1}{2} \sum_{k=1}^K \left(\left(\frac{1}{\sigma_w^2} + \frac{1}{\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \mathbb{E}_{q_{i+1}(w)} [s_{n,k}] \right) w_k^\top w_k - 2 w_k^\top \left(\frac{1}{\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \mathbb{E}_{q_{i+1}(w)} [s_{n,k}] q_m \right) \right)$$

+ const.

$$=: \hat{\sigma}_{k,i+1}^{-2}$$

$$=: \hat{\sigma}_{k,i+1}^{-2} \hat{\mu}_{k,i+1}$$

$$= -\frac{1}{2} \sum_{k=1}^K \left(w_k^\top (\hat{\sigma}_{k,i+1}^{-2} I_d)^{-1} w_k - 2 w_k^\top (\hat{\sigma}_{k,i+1}^{-2} I_d)^{-1} \hat{\mu}_{k,i+1} \right) + \text{const.}$$

$$= \sum_{k=1}^K \mathcal{N}(w_k | \hat{\mu}_{k,i+1}, \hat{\sigma}_{k,i+1}^{-2} I_d).$$

$$\Leftrightarrow q_{i+1}(w) = \prod_{k=1}^K \mathcal{N}(w_k | \hat{\mu}_{k,i+1}, \hat{\sigma}_{k,i+1}^{-2} I_d).$$

右辺は各 w_k の分布の積の形となる。 $q_{i+1}(w) = \prod_{k=1}^K q_{i+1}(w_k)$ と独立な形になる。

各 w_k ($k=1, \dots, K$) は独立。

$$q_{i+1}(w_k) = \mathcal{N}(w_k | \hat{\mu}_{k,i+1}, \hat{\sigma}_{k,i+1}^2 I_d),$$

$$\hat{\sigma}_{k,i+1}^2 = \left(\frac{1}{\sigma_w^2} + \frac{1}{\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \mathbb{E}_{q_{i+1}(s)}[S_{n,k}] \right)^{-1}$$

$$\hat{\mu}_{k,i+1} = \frac{\hat{\sigma}_{k,i+1}^2}{\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \mathbb{E}_{q_{i+1}(s)}[S_{n,k}] q_n$$

と更新すればいい。

分布の形、すなはち、 T_i の期待値を計算する。

$$\mathbb{E}_{q_i(w)}[w_k] = \mathbb{E}_{q_i(w_k)}[w_k] = \hat{\mu}_{k,i}$$

$\mathcal{N}(w_k | \hat{\mu}_{k,i}, \hat{\sigma}_{k,i}^2 I_d)$ のとき

w_k の各成分 $w_{k,j}$ は独立である

$\mathcal{N}(\hat{\mu}_{k,i,j}, \hat{\sigma}_{k,i}^2)$ に従う。

$$\begin{aligned} \mathbb{E}_{q_i(w)}[w_k^\top w_k] &= \mathbb{E}_{q_i(w_k)}[w_k^\top w_k] = \sum_{j=1}^d \mathbb{E}_{q_i(w_k)}[w_{k,j}^2] \\ &= \sum_{j=1}^d (\hat{\sigma}_{k,i}^2 + \hat{\mu}_{k,i,j}^2) = d\hat{\sigma}_{k,i}^2 + \hat{\mu}_{k,i}^\top \hat{\mu}_{k,i}. \end{aligned}$$

$$\mathbb{E}_{q_{i+1}(s)}[S_{n,k}] = \mathbb{E}_{q_{i+1}(s_n)}[S_{n,k}] = \hat{\sigma}_{n,k,i+1}.$$

以上より、1ラーニングの更新式は次の通り。

[E-step]

$$\alpha_{n,k,i+1} = \hat{\sigma}_{n,k,i} \exp \left(-\frac{1}{2\sigma_x^2} (d\hat{\sigma}_{k,i}^2 + \hat{\mu}_{k,i}^\top \hat{\mu}_{k,i}) + \frac{1}{\sigma_x^2} q_n^\top \hat{\mu}_{k,i} \right)$$

$$\hat{\sigma}_{n,k,i+1} = \frac{\alpha_{n,k,i+1}}{\sum_{k'=1}^K \alpha_{n,k',i+1}}, \quad \hat{\pi}_{n,i+1} = \begin{pmatrix} \hat{\sigma}_{n,k_1,i+1} \\ \vdots \\ \hat{\sigma}_{n,k_M,i+1} \end{pmatrix}.$$

[M-step]

$$\hat{\sigma}_{k,i+1}^2 = \left(\frac{1}{\sigma_w^2} + \frac{1}{\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \hat{\sigma}_{n,k,i+1} \right)^{-1},$$

$$\hat{\mu}_{k,i+1} = \frac{\hat{\sigma}_{k,i+1}^2}{\sigma_x^2} \sum_{n=1}^N \hat{\sigma}_{n,k,i+1} q_n.$$

4.2.3 Laplace 近似.

Laplace 近似 (Laplace approximation) :

事後分布 $p(\mathbf{z}|\mathbf{x})$ など。

複雑な分布をより簡単な Gauss 分布を使って近似的に表現する手法.

分布 $p(\mathbf{z})$ のモード (mode) : $p(\mathbf{z})$ の極大値を与える点.

\mathbf{z}_0 : 近似したい分布 $p(\mathbf{z})$ の任意のモード.

\mathbf{z} について.

$$\text{Gauss 分布では}, \log \mathcal{N}(\mathbf{z} | \mu, \Sigma) = -\frac{1}{2} (\mathbf{z} - \mu)^T \Sigma^{-1} (\mathbf{z} - \mu) + \text{const.}$$

の形で T 次元 \mathbf{z} に対して, $\log p(\mathbf{z})$ を \mathbf{z} を中心で "Taylor 展開" してみる.

$$\log p(\mathbf{z})$$

$$= \underbrace{\log p(\mathbf{z}_0)}_{\text{const.}} + \left(\nabla_{\mathbf{z}} \log p(\mathbf{z}) \Big|_{\mathbf{z}=\mathbf{z}_0} \right)^T (\mathbf{z} - \mathbf{z}_0) + \frac{1}{2} (\mathbf{z} - \mathbf{z}_0)^T \left(\nabla_{\mathbf{z}}^2 \log p(\mathbf{z}) \Big|_{\mathbf{z}=\mathbf{z}_0} \right) (\mathbf{z} - \mathbf{z}_0)$$

$$+ O(\|\mathbf{z} - \mathbf{z}_0\|^3)$$

$$\approx \left(\nabla_{\mathbf{z}} \log p(\mathbf{z}) \Big|_{\mathbf{z}=\mathbf{z}_0} \right)^T (\mathbf{z} - \mathbf{z}_0) + \frac{1}{2} (\mathbf{z} - \mathbf{z}_0)^T \left(\nabla_{\mathbf{z}}^2 \log p(\mathbf{z}) \Big|_{\mathbf{z}=\mathbf{z}_0} \right) (\mathbf{z} - \mathbf{z}_0) + \text{const.}$$

\mathbf{z}_0 は $p(\mathbf{z})$ のモードであり, $\log p(\mathbf{z})$ の極大値であるので,

$$\nabla_{\mathbf{z}} \log p(\mathbf{z}) \Big|_{\mathbf{z}=\mathbf{z}_0} = \mathbb{0}.$$

ゆえに,

$$\log p(\mathbf{z}) \approx \frac{1}{2} (\mathbf{z} - \mathbf{z}_0)^T \left(\nabla_{\mathbf{z}}^2 \log p(\mathbf{z}) \Big|_{\mathbf{z}=\mathbf{z}_0} \right) (\mathbf{z} - \mathbf{z}_0) + \text{const.}$$

また, $\Lambda(\mathbf{z}_0) := -\nabla_{\mathbf{z}}^2 \log p(\mathbf{z}) \Big|_{\mathbf{z}=\mathbf{z}_0}$ とかけて,

$$\log p(\mathbf{z}) = -\frac{1}{2} (\mathbf{z} - \mathbf{z}_0)^T \Lambda(\mathbf{z}_0) (\mathbf{z} - \mathbf{z}_0) + \text{const.}$$

$$\Leftrightarrow p(\mathbf{z}) \approx C \exp \left(-\frac{1}{2} (\mathbf{z} - \mathbf{z}_0)^T \Lambda(\mathbf{z}_0) (\mathbf{z} - \mathbf{z}_0) \right) = \mathcal{N}(\mathbf{z} | \mathbf{z}_0, \Lambda(\mathbf{z}_0)^{-1}) \text{ と近似でき。}$$

- 適当な最適化手法で $p(\mathbf{z})$ のモード \mathbf{z}_0 を求め、 $\Lambda(\mathbf{z}_0)$ を計算すること。
- 近似 $N(\mathbf{z} | \mathbf{z}_0, \Lambda(\mathbf{z}_0)^{-1})$ を得る。

Remark 多峰的 (multimodal) な分布では、モード \mathbf{z} の選び方による得られる近似が異なる。

- モード近傍のみを考慮した近似なので、分布全体を近似できていない。
- Hesse行列の計算をする必要がある。
- $p(\mathbf{z})$ が実数の分布でないと、直接適用できない。

4.2.4 モーメントマッチングによる近似。

4.2.4.1 モーメントマッチング。

- 分布 $p(\mathbf{z})$ と、より簡単な分布 $q_p(\mathbf{z})$ で近似する。

[仮定] $q_p(\mathbf{z})$ は指數型分布族、i.e.,

$$q_p(\mathbf{z}; \eta) = h(\mathbf{z}) \exp(\eta^\top t(\mathbf{z}) - a(\eta)).$$

- $p \in q_p$ で近似するため、 p の q_p に対する KL-divergence $D_{KL}[p(\mathbf{z}) \| q_p(\mathbf{z}; \eta)]$ (forward KL-divergence) を最小化する

Remark 逆分推論で reverse KL-divergence $D_{KL}[q_p(\mathbf{z}; \eta) \| p(\mathbf{z})]$ を最小化していく。

今日は、「 p を真の分布とみなす」、 q_p の p との距離度を最小化する。

- 解く問題は $\eta^* = \underset{\eta \in \mathcal{H}}{\operatorname{argmin}} D_{KL}[p(\mathbf{z}) \| q_p(\mathbf{z}; \eta)]$ 。
但し、 $\mathcal{H} = \{\eta \mid \exp(a(\eta)) = \int \exp(\eta^\top t(\mathbf{z})) h(\mathbf{z}) d\mathbf{z} < \infty\}$

$D_{KL}[p(z) \| q(z; \eta)]$ を整理します。

$$\begin{aligned}
 D_{KL}[p(z) \| q(z; \eta)] &= \int p(z) \log \frac{p(z)}{q(z; \eta)} dz \\
 &= \int p(z) \log p(z) dz - \int p(z) \log q(z; \eta) dz \\
 &= -\mathbb{E}_p[\log q(z; \eta)] + \mathbb{E}_p[\log p(z)] \quad \text{const.} \\
 &= -\mathbb{E}_p[\log h(z) + \eta^T t(z) - a(\eta)] + \text{const.} \\
 &= -\mathbb{E}_p[\log h(z)] - \eta^T \mathbb{E}_p[t(z)] + a(\eta) + \text{const.} \\
 &= -\eta^T \mathbb{E}_p[t(z)] + a(\eta) + \text{const.}
 \end{aligned}$$

したがって $\eta^* = \underset{\eta}{\operatorname{argmin}} \left(-\eta^T \mathbb{E}_p[t(z)] + a(\eta) \right)$.

[Claim] $-\eta^T \mathbb{E}_p[t(z)] + a(\eta)$ は η について凸関数。

p.f. $-\eta^T \mathbb{E}_p[t(z)]$ は η について線形で、 $a(\eta)$ は正定値。 $\eta^T \mathbb{E}_p[t(z)]$ は凸関数。

$\nabla_\eta^2 a(\eta) = V_p[t(z)] > 0$ となる。 $\eta^T \mathbb{E}_p[t(z)]$ は凸関数の和で、つまり凸関数。 \square

[Claim] 自然パラメータ η の動きの空間

$$\mathcal{H} = \left\{ \eta \mid \exp(a(\eta)) = \int \exp(\eta^T t(z)) h(z) dz < \infty \right\}$$

は凸集合。

p.f. $\eta_1, \eta_2 \in \mathcal{H}, \alpha \in (0, 1)$ とする。 $\alpha\eta_1 + (1-\alpha)\eta_2 \in \mathcal{H}$ を示す。

$$\begin{aligned}
 &\int \exp((\alpha\eta_1 + (1-\alpha)\eta_2)^T t(z)) h(z) dz \\
 &= \int \exp(\alpha\eta_1^T t(z)) \exp((1-\alpha)\eta_2^T t(z)) h(z) dz \\
 &= \int (\exp(\eta_1^T t(z)))^\alpha (\exp(\eta_2^T t(z)))^{1-\alpha} h(z) dz
 \end{aligned}$$

$$\leq \left(\int \exp(\eta_1^\top t(z)) h(z) dz \right)^\alpha \left(\int \exp(\eta_2^\top t(z)) h(z) dz \right)^{1-\alpha} \quad (\because \text{Hölderの不等式})$$

\$\therefore\$

以上より、この問題は凸最適化問題なので、極値が最小値をえる。

$$\begin{aligned} & -\mathbb{E}_{p(z)}[t(z)] + \nabla_\eta a(\eta) \Big|_{\eta=\eta^*} = 0. \quad \nabla_\eta a(\eta) = \mathbb{E}_q[t(z)] \\ \Leftrightarrow & \mathbb{E}_{q(z;\eta^*)}[t(z)] = \mathbb{E}_{p(z)}[t(z)] \end{aligned}$$

結局、 q を指數型分布族に制限した際の最適な q は、十分統計量 $t(z)$ の μ と q_{μ} の平均と一致するようにならなければ η^* を選んだときの $q(z;\eta^*)$ になる。

このようにして近似する手法を **モーメントマッチング** (moment matching) という。

Remark $\cdot p(z)$ のモーメントとは $z \sim p(z)$ のときの $\mathbb{E}_p[z]$, $\mathbb{E}_p[z z^T]$ などの量という

$\mathbb{E}_{p(z)}[t(z)]$ は、 $p(z)$ のモーメントではないのだ"が、指數型分布族 $q(z;\eta)$ に対して、

$\mu = \mathbb{E}_{q(z;\eta^*)}[t(z)]$ のことを「モーメントマッチング」と呼ぶ。実際、 $t = t(z)$ の分布は

$q(t;\eta) = \tilde{h}(t) \exp(\eta^\top t - a(\eta))$ であり、 $\mathbb{E}_{q(t;\eta)}[t] = \nabla_\eta a(\eta) = \mathbb{E}_{q(z;\eta)}[t(z)]$ なので

μ は $q(t;\eta)$ の1次モーメント。「モーメントマッチング」とはモーメントパラメータをあわせること、と考えられる。

4.2.4.2 仮定密度フィルタリング。

制御分野で「弱い方からも」と。

“online Bayesian learning”, “weak marginalization” も。

仮定密度フィルタリング (assumed density filtering)

データ D_1, D_2, \dots を逐次的に学習する。

1つめの θ の事前分布を $p(\theta)$ とすると、データ D_1 を観測後の事後分布は、

$p(\theta|D_1) \propto p(D_1|\theta)p(\theta)$ となる。尤度函数 $p(D_1|\theta)$ が失役なら、

$$p(\theta|\mathcal{D}_1), p(\theta|\mathcal{D}_1, \mathcal{D}_2), p(\theta|\mathcal{D}_1, \mathcal{D}_2, \mathcal{D}_3), \dots$$

は全て $p(\theta)$ と同じ形の分布で解析的に計算できる。

- 失敗しない状況を考える。 $p(\theta|\mathcal{D}_1)$ は必ず近似分布となる。 $p(\theta)$ と同じ分布になるよう $q_1(\theta)$ を設定し、

$$q_1(\theta) \approx r_1(\theta) = \frac{1}{Z_1} p(\mathcal{D}_1|\theta) p(\theta), \quad Z_1 = \int p(\mathcal{D}_1|\theta) p(\theta) d\theta.$$

と近似する。 q_1 は $q_1(\theta) = \arg \min_{q_1} D_{KL}[r_1(\theta) \| q_1(\theta)]$ として決定する。

p が指数型分布族のとき、これはモーメントマッチングでできる。

以降も、

$$q_i(\theta) \approx r_i(\theta) = \frac{1}{Z_i} p(\mathcal{D}_i|\theta) q_{i-1}(\theta), \quad Z_i = \int p(\mathcal{D}_i|\theta) q_{i-1}(\theta) d\theta,$$

$$q_i(\theta) = \arg \min_{q_i} D_{KL}[r_i(\theta) \| q_i(\theta)]$$

を近似していく。こうすることで、 $q_i(\theta)$ は同じ分布を保ったまま逐次的に事後分布を更新していく。

以降 $f_i(\theta) = p(\mathcal{D}_i|\theta)$ と書く。

4.2.4.3 1次元 Gauss 分布の例。 $\mathcal{N}(\theta|\mu_i, \nu_i) = \exp\left(-\frac{1}{2\nu_i}\theta^2 + \frac{\mu_i}{\nu_i}\theta - \frac{\mu_i^2}{2\nu_i} - \frac{1}{2}\log(2\pi\nu_i)\right)$

$q_i(\theta) = \mathcal{N}(\theta|\mu_i, \nu_i)$ の場合。これは指数型分布族なのでモーメントマッチングができる。

十分統計量は $\tau(\theta) = \begin{pmatrix} \theta \\ \theta^2 \end{pmatrix}$ 。 $r_{i+1}(\theta)$ が正规化定数は、

$$Z_{i+1} = \int f_{i+1}(\theta) q_i(\theta) d\theta.$$

$$= \int f_{i+1}(\theta) \frac{1}{\sqrt{2\pi\nu_i}} \exp\left(-\frac{1}{2\nu_i}(\theta-\mu_i)^2\right) d\theta.$$

すゞ,

$$\begin{aligned} & \frac{\partial}{\partial \mu_i} \log Z_{i+1} \\ &= \frac{1}{Z_{i+1}} \int f_{i+1}(\theta) \frac{1}{\sqrt{2\pi v_i}} \exp\left(-\frac{1}{2v_i}(\theta - \mu_i)^2\right) \left(\frac{\theta - \mu_i}{v_i}\right) d\theta \\ &= \frac{1}{v_i} \int r_{i+1}(\theta) (\theta - \mu_i) d\theta \\ &= \frac{1}{v_i} \left(\mathbb{E}_{r_{i+1}(\theta)}[\theta] - \mu_i \right). \end{aligned}$$

$$\therefore \mathbb{E}_{r_{i+1}(\theta)}[\theta] = \mu_i + v_i \frac{\partial}{\partial \mu_i} \log Z_{i+1}.$$

次に

$$\begin{aligned} & \frac{\partial}{\partial v_i} \log Z_{i+1} \\ &= \frac{1}{Z_{i+1}} \int f_{i+1}(\theta) \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \left(-\frac{1}{2} \frac{1}{v_i \sqrt{v_i}} + \frac{1}{\sqrt{v_i}} \frac{(\theta - \mu_i)^2}{2v_i^2} \right) \exp\left(-\frac{1}{2v_i}(\theta - \mu_i)^2\right) d\theta \\ &= \int r_{i+1}(\theta) \left(-\frac{1}{2v_i} + \frac{(\theta - \mu_i)^2}{2v_i^2} \right) d\theta \\ &= \frac{1}{2v_i^2} \int r_{i+1}(\theta) (-v_i + \theta^2 - 2\mu_i \theta + \mu_i^2) d\theta \\ &= -\frac{1}{2v_i} + \frac{1}{2v_i^2} \left(\mathbb{E}_{r_{i+1}(\theta)}[\theta^2] - 2\mu_i \mathbb{E}_{r_{i+1}(\theta)}[\theta] + \mu_i^2 \right). \end{aligned}$$

$$\therefore \mathbb{E}_{r_{i+1}(\theta)}[\theta^2] = v_i - \mu_i^2 + 2\mu_i \mathbb{E}_{r_{i+1}(\theta)}[\theta] + 2v_i^2 \frac{\partial}{\partial v_i} \log Z_{i+1}.$$

モーメントマッチング' いふ'.

$$\mathbb{E}_{q_{i+1}(\theta)}[\theta] = \mathbb{E}_{r_{i+1}(\theta)}[\theta], \quad \mathbb{E}_{q_{i+1}(\theta)}[\theta^2] = \mathbb{E}_{r_{i+1}(\theta)}[\theta^2]$$

と書くべき

$$\mathbb{E}_{q_{i+1}(\theta)}[\theta] = \mu_{i+1} \text{ と書く}, \quad \mu_{i+1} = \mu_i + v_i \frac{\partial}{\partial \mu_i} \log Z_{i+1}.$$

$$\mathbb{E}_{q_{i+1}(\theta)}[\theta^2] = v_{i+1} + \mu_{i+1}^2 \text{ と書く},$$

$$V_{i+1} = V_i - (\mu_{i+1} - \mu_i)^2 + 2V_i^2 \frac{\partial}{\partial V_i} \log Z_{i+1}$$

$$= V_i - V_i^2 \left(\left(\frac{\partial}{\partial \mu_i} \log Z_{i+1} \right)^2 - 2 \frac{\partial}{\partial V_i} \log Z_{i+1} \right).$$

各正规化定数 Z_i の計算で求められ、このように逐次更新する。

4.2.4.4 ガンマ分布の例

$$q_i(\theta) = \text{Gam}(\theta | a_i, b_i) = \frac{b_i^{a_i}}{\Gamma(a_i)} \theta^{a_i-1} e^{-b_i\theta}$$

$$= \exp((a_i-1)\log\theta - b_i\theta + a_i\log b_i - \log\Gamma(a_i))$$

の場合、指数型分布族。十分統計量は $\tau(\theta) = \begin{pmatrix} \log\theta \\ \theta \end{pmatrix}$

$r_{i+1}(\theta)$ が正规化定数 Z_{i+1}

$$Z_{i+1}(a_i, b_i) = \int f_{i+1}(\theta) \text{Gam}(\theta | a_i, b_i) d\theta.$$

$$\mathbb{E}_{r_{i+1}(\theta)}[\theta]$$

$$= \frac{1}{Z_{i+1}(a_i, b_i)} \int \theta f_{i+1}(\theta) \frac{b_i^{a_i}}{\Gamma(a_i)} \theta^{a_i-1} e^{-b_i\theta} d\theta$$

$$= \frac{1}{Z_{i+1}(a_i, b_i)} \int f_{i+1}(\theta) \frac{b_i^{a_i}}{\Gamma(a_i)} \theta^{a_i} e^{-b_i\theta} d\theta$$

$$= \frac{1}{Z_{i+1}(a_i, b_i)} \frac{\Gamma(a_i+1)}{b_i \Gamma(a_i)} Z_{i+1}(a_i+1, b_i)$$

$$= \frac{a_i Z_{i+1}(a_i+1, b_i)}{b_i Z_{i+1}(a_i, b_i)}$$

$$\begin{aligned} & \downarrow \Gamma(a_i+1) \\ & = a_i \Gamma(a_i) \end{aligned}$$

$$\mathbb{E}_{r_{i+1}(\theta)}[\log\theta]$$

$$= \frac{1}{Z_{i+1}(a_i, b_i)} \int \log\theta f_{i+1}(\theta) \frac{b_i^{a_i}}{\Gamma(a_i)} \theta^{a_i-1} e^{-b_i\theta} d\theta$$

$$= \frac{1}{Z_{i+1}(a_i, b_i)} \int f_{i+1}(\theta) \frac{b_i^{a_i}}{\Gamma(a_i)} \left(\frac{\partial}{\partial a_i} \theta^{a_i-1} \right) e^{-b_i\theta} d\theta$$

$$= \frac{1}{Z_{i+1}(a_i, b_i)} \frac{b_i^{a_i}}{\Gamma(a_i)} \frac{\partial}{\partial a_i} \int f_{i+1}(\theta) \theta^{a_i-1} e^{-b_i\theta} d\theta$$

$$\begin{aligned}
&= \frac{1}{Z_{i+1}(a_i, b_i)} \frac{b_i^{a_i}}{\Gamma(a_i)} \frac{\partial}{\partial a_i} \left(Z_{i+1}(a_i, b_i) \frac{\Gamma(a_i)}{b_i^{a_i}} \right) \\
&= \frac{\partial}{\partial a_i} \log \left(Z_{i+1}(a_i, b_i) \frac{\Gamma(a_i)}{b_i^{a_i}} \right) \\
&= \frac{\partial}{\partial a_i} \log Z_{i+1}(a_i, b_i) + \frac{d}{da_i} \log \Gamma(a_i) - \log b_i.
\end{aligned}$$

ここで、 $\bar{\theta}$ のノンマージン数 $\psi(a) = \frac{d}{da} \log \Gamma(a)$ を仮定する。

$$\mathbb{E}_{f_{i+1}(\theta)}[\log \theta] = \frac{\partial}{\partial a_i} \log Z_{i+1}(a_i, b_i) + \psi(a_i) - \log b_i.$$

モーメントマッチングをすると、

$$\mathbb{E}_{q_{i+1}(\theta)}[\theta] = \frac{a_{i+1}}{b_{i+1}} = \frac{a_i Z_{i+1}(a_{i+1}, b_i)}{b_i Z_{i+1}(a_i, b_i)}$$

$$\mathbb{E}_{q_{i+1}(\theta)}[\log \theta] = \psi(a_{i+1}) - \log b_{i+1} = \frac{\partial}{\partial a_i} \log Z_{i+1}(a_i, b_i) + \psi(a_i) - \log b_i.$$

となる。この更新は数值的に行なわれない。

この妥当性は不明。

しかし KL-divergence が最も小さい。

・解析的な更新式を得るために、 $\log \theta$ の 1 次導数 θ^2 の平均をあらわすこととする。

$$\mathbb{E}_{f_{i+1}(\theta)}[\theta^2]$$

$$\begin{aligned}
&= \frac{1}{Z_{i+1}(a_i, b_i)} \int \theta^2 f_{i+1}(\theta) \frac{b_i^{a_i}}{\Gamma(a_i)} \theta^{a_i-1} e^{-b_i \theta} d\theta \\
&= \frac{1}{Z_{i+1}(a_i, b_i)} \int f_{i+1}(\theta) \frac{b_i^{a_i}}{\Gamma(a_i)} \theta^{a_i+1} e^{-b_i \theta} d\theta \\
&= \frac{1}{Z_{i+1}(a_i, b_i)} \frac{\Gamma(a_i+2)}{b_i^2 \Gamma(a_i)} Z_{i+1}(a_i+2, b_i) \\
&= \frac{(a_i+1) a_i Z_{i+1}(a_i+2, b_i)}{b_i^2 Z_{i+1}(a_i, b_i)}.
\end{aligned}$$

更新のためには、以下のようになります。

$$\mathbb{E}_{q_{i+1}(\theta)}[\theta] = \frac{a_{i+1}}{b_{i+1}} = \frac{a_i Z_{i+1}(a_{i+1}, b_i)}{b_i Z_{i+1}(a_i, b_i)},$$

$$\mathbb{E}_{q_{i+1}(\theta)}[\theta^2] = \frac{a_{i+1}}{b_{i+1}^2} = \frac{(a_i+1) a_i Z_{i+1}(a_i+2, b_i)}{b_i^2 Z_{i+1}(a_i, b_i)} - \left(\frac{a_i Z_{i+1}(a_{i+1}, b_i)}{b_i Z_{i+1}(a_i, b_i)} \right)^2.$$

$$a_{i+1} = \frac{a_i Z_{i+1}(a_{i+1}, b_i)}{b_i Z_{i+1}(a_i, b_i)} b_{i+1} \text{ で 第 } 2 \text{ 式' } i \text{ の係数 } ,$$

$$\frac{1}{b_{i+1}} \frac{a_i Z_{i+1}(a_{i+1}, b_i)}{b_i Z_{i+1}(a_i, b_i)} = \frac{(a_{i+1}) a_i Z_{i+1}(a_{i+2}, b_i)}{b_i^2 Z_{i+1}(a_i, b_i)} - \left(\frac{a_i Z_{i+1}(a_{i+1}, b_i)}{b_i Z_{i+1}(a_i, b_i)} \right)^2$$

$$\frac{1}{b_{i+1}} a_i Z_{i+1}(a_{i+1}, b_i) = \frac{(a_{i+1}) a_i Z_{i+1}(a_{i+2}, b_i)}{b_i} - \frac{a_i^2 Z_{i+1}(a_{i+1}, b_i)}{b_i Z_{i+1}(a_i, b_i)}^2$$

$$\frac{1}{b_{i+1}} = \frac{(a_{i+1}) Z_{i+1}(a_{i+2}, b_i)}{b_i Z_{i+1}(a_{i+1}, b_i)} - \frac{a_i Z_{i+1}(a_{i+1}, b_i)}{b_i Z_{i+1}(a_i, b_i)}$$

$$= \frac{1}{b_i} \left(\frac{(a_{i+1}) Z_{i+1}(a_{i+2}, b_i)}{Z_{i+1}(a_{i+1}, b_i)} - \frac{a_i Z_{i+1}(a_{i+1}, b_i)}{Z_{i+1}(a_i, b_i)} \right).$$

$$\therefore b_{i+1} = b_i \left(\frac{(a_{i+1}) Z_{i+1}(a_{i+2}, b_i)}{Z_{i+1}(a_{i+1}, b_i)} - \frac{a_i Z_{i+1}(a_{i+1}, b_i)}{Z_{i+1}(a_i, b_i)} \right)^{-1}$$

$$a_{i+1} = a_i \frac{Z_{i+1}(a_{i+1}, b_i)}{Z_{i+1}(a_i, b_i)} \left(\frac{(a_{i+1}) Z_{i+1}(a_{i+2}, b_i)}{Z_{i+1}(a_{i+1}, b_i)} - \frac{a_i Z_{i+1}(a_{i+1}, b_i)}{Z_{i+1}(a_i, b_i)} \right)^{-1}$$

$$= a_i \left(\frac{(a_{i+1}) Z_{i+1}(a_{i+2}, b_i) Z_{i+1}(a_i, b_i)}{Z_{i+1}(a_{i+1}, b_i)^2} - a_i \right)^{-1}.$$

各正規化定数 $Z(a_i, b_i)$ を計算すれば、このような更新ができます。

4.2.5 例：モーメントマッチングによるプロビット回帰モデルの学習。

Probability unit に沿って

プロビット回帰 (probit regression) を学ぶ：

2値分類のための一般化線形モデルの一つ。モデルは出力値は分類確率。

- 1) リンク函数は プロビット函数 (probit func.) :

$$\text{probit}(p) = \Phi^{-1}(p), \quad p \in (0, 1) \quad \leftarrow \text{重ね標準正規分布の cdf.}\right.$$

c.f.) ロジスティック回帰も同様のモデル。これらはリンク函数として ロジット函数 (logit func.)
ロジスティック函数の逆函数「対数オッズ比」という。

$$\text{logit}(p) = \log \frac{p}{1-p}, \quad p \in (0, 1)$$

の一般化線形モデル。

ロジスティック回帰よりもプロビット回帰の方が外れ値に敏感らしい。(PRML Ch 4.3)

- ・ 入力 : $\mathcal{X} = \{x_1, \dots, x_N\} \subseteq \mathbb{R}$, \leftarrow 多次元でも可

クラス : $\mathcal{Y} = \{y_1, \dots, y_N\}$

プロピットモデル : $p(y|x, w) = \Phi(y_w x)$. ($w \in \mathbb{R}^{1 \times 1 + d - 1}$)

尤度函数 : $p(\mathcal{Y}|\mathcal{X}, w) = \prod_{n=1}^N p(y_n|x_n, w) = \prod_{n=1}^N \Phi(y_n w x_n)$.

w の事前分布 $p(w) = \mathcal{N}(w|0, v_0)$ ($v_0 > 0$ はハイパラメータ)

- ・ モデルの周辺尤度は

$$p(\mathcal{Y}|\mathcal{X}) = \int p(\mathcal{Y}|\mathcal{X}, w)p(w)dw.$$

これは解析的に計算できないので、 \rightarrow 逐加法による

仮定密度フィルタリングをする。

- ・ $f_i(w) = p(y_i|x_i, w)$ とし、ハイパラメータ w の事後分布は

$$q_i(w) = \mathcal{N}(w|\mu_i, v_i)$$

で近似する。 $\mu_0 = 0$, $q_0(w) = p(w) = \mathcal{N}(w|\mu_0, v_0)$ とする。

→ ステップ目の更新は

$$q_{i+1}(w) \approx \frac{1}{z_{i+1}} f_{i+1}(w) q_i(w)$$

をモーメントマッチングで行なうといい。

- ・ 正規化定数

$$z_{i+1} = \int p(y_{i+1}|x_{i+1}, w) \mathcal{N}(w|\mu_i, v_i) dw$$

は解析的に計算することはできる。

- $\chi_{i+1} = 0$ のとき, $P(Y_{i+1} | \chi_{i+1}, w) = \Phi(0) = \frac{1}{2}$.

このとき $Z_{i+1} = \int \Phi(0) N(w | \mu_i, v_i) dw = \Phi(0) = \frac{1}{2}$.

- $\chi_{i+1} \neq 0$ のとき, $y_{i+1} \in \{\pm 1\}$ かつ $\chi_{i+1} y_{i+1} \neq 0$.

Z_{i+1}

$$\begin{aligned}
 &= \int_{-\infty}^{\infty} \Phi(y_{i+1} w \chi_{i+1}) \frac{1}{\sqrt{2\pi v_i}} \exp\left(-\frac{1}{2v_i}(w - \mu_i)^2\right) dw \\
 &= \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi v_i}} \exp\left(-\frac{1}{2v_i}(w - \mu_i)^2\right) \left(\int_{-\infty}^{y_{i+1} w \chi_{i+1}} \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{1}{2}t^2\right) dt \right) dw \quad \stackrel{s = \frac{t}{\chi_{i+1} y_{i+1}} \text{ とおこ}}{\downarrow} \\
 &= \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi v_i}} \exp\left(-\frac{1}{2v_i}(w - \mu_i)^2\right) \left(\int_{-\infty}^w \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{1}{2}\chi_{i+1}^2 y_{i+1}^2 s^2\right) \chi_{i+1} y_{i+1} ds \right) dw \\
 &= \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi v_i}} \exp\left(-\frac{1}{2v_i} u^2\right) \left(\int_{-\infty}^{\mu_i \chi_{i+1}} \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{1}{2}\chi_{i+1}^2 y_{i+1}^2 s^2\right) \chi_{i+1} y_{i+1} ds \right) du \quad \stackrel{u = w - \mu_i \text{ とおこ}}{\downarrow} \\
 &= \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi v_i}} \exp\left(-\frac{1}{2v_i} u^2\right) \left(\int_{-\infty}^{\mu_i} \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{1}{2}\chi_{i+1}^2 y_{i+1}^2 (u+v)^2\right) \chi_{i+1} y_{i+1} dv \right) du \quad \stackrel{v = s - u \text{ とおこ}}{\downarrow} \\
 &= \int_{-\infty}^{\mu_i} \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \chi_{i+1} y_{i+1} \left(\int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi v_i}} \exp\left(-\frac{1}{2v_i} u^2\right) \exp\left(-\frac{1}{2}\chi_{i+1}^2 y_{i+1}^2 (u+v)^2\right) du \right) dv \quad \stackrel{\text{積分順序の変更}}{\downarrow} \\
 &= \int_{-\infty}^{\mu_i} \frac{\chi_{i+1} y_{i+1}}{\sqrt{2\pi}} \left(\int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi v_i}} \exp\left(-\frac{u^2}{2v_i}\right) \exp\left(-\frac{1}{2}\chi_{i+1}^2 y_{i+1}^2 (u^2 + 2uv + v^2)\right) du \right) dv \quad \stackrel{\text{展開}}{\downarrow} \\
 &= \int_{-\infty}^{\mu_i} \frac{\chi_{i+1} y_{i+1}}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{\chi_{i+1}^2 y_{i+1}^2 v^2}{2}\right) \left(\int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi v_i}} \exp\left(-\frac{1}{2v_i}((1 + \frac{\chi_{i+1}^2 y_{i+1}^2}{v_i})u^2 + 2v_i \chi_{i+1}^2 y_{i+1}^2 uv)\right) du \right) dv \quad \stackrel{\text{展開}}{\downarrow} \\
 &= \int_{-\infty}^{\mu_i} \frac{\chi_{i+1} y_{i+1}}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{\chi_{i+1}^2 y_{i+1}^2 v^2}{2}\right) \left(\int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi v_i}} \exp\left(-\frac{1}{2v_i} \left(u + \frac{\chi_{i+1}^2 y_{i+1}^2}{1 + \chi_{i+1}^2} v \right)^2 + \frac{\chi_{i+1}^2 v^2}{2v_i(1 + \chi_{i+1}^2)}\right) du \right) dv \quad \stackrel{\text{平方完成}}{\downarrow} \\
 &= \int_{-\infty}^{\mu_i} \frac{\chi_{i+1} y_{i+1}}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{\chi_{i+1}^2 y_{i+1}^2 v^2}{2} + \frac{\chi_{i+1}^2 v^2}{2v_i(1 + \chi_{i+1}^2)}\right) \left(\int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi v_i}} \exp\left(-\frac{1 + \chi_{i+1}^2}{2v_i} \left(u + \frac{\chi_{i+1}^2 v}{1 + \chi_{i+1}^2} \right)^2\right) du \right) dv.
 \end{aligned}$$

$\vdots \vdots \vdots$,

$$\begin{aligned}
 &\int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{\sqrt{2\pi v_i}} \exp\left(-\frac{1 + \chi_{i+1}^2}{2v_i} \left(u + \frac{\chi_{i+1}^2 v}{1 + \chi_{i+1}^2} \right)^2\right) du \\
 &= \frac{1}{\sqrt{1 + \chi_{i+1}^2}} \int_{-\infty}^{\infty} \sqrt{\frac{1 + \chi_{i+1}^2}{2\pi v_i}} \exp\left(-\frac{1 + \chi_{i+1}^2}{2v_i} \left(u + \frac{\chi_{i+1}^2 v}{1 + \chi_{i+1}^2} \right)^2\right) du \\
 &= \frac{1}{\sqrt{1 + \chi_{i+1}^2}} \int_{-\infty}^{\infty} N(u - \frac{\chi_{i+1}^2 v}{1 + \chi_{i+1}^2}, \frac{v_i}{1 + \chi_{i+1}^2}) du = \frac{1}{\sqrt{1 + \chi_{i+1}^2}}.
 \end{aligned}$$

57.

Z_{i+1}

$$\begin{aligned}
 &= \int_{-\infty}^{\mu_i} \frac{x_{i+1} y_{i+1}}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{x_{i+1}^2 y_{i+1}^2 v^2}{2} + \frac{c_{i+1}^2 v^2}{2v_i(1+c_{i+1})}\right) \frac{1}{\sqrt{1+c_{i+1}}} dv \\
 &= \int_{-\infty}^{\mu_i} \frac{x_{i+1} y_{i+1}}{\sqrt{2\pi(1+c_{i+1})}} \exp\left(-\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{v_i} \left(c_{i+1} - \frac{c_{i+1}^2}{1+c_{i+1}}\right) v^2\right) dv \\
 &= \int_{-\infty}^{\mu_i} \frac{x_{i+1} y_{i+1}}{\sqrt{2\pi(1+c_{i+1})}} \exp\left(-\frac{1}{2} \frac{c_{i+1}}{v_i(1+c_{i+1})} v^2\right) dv \\
 &= \int_{-\infty}^{\mu_i} \frac{x_{i+1} y_{i+1}}{\sqrt{2\pi(1+c_{i+1})}} \exp\left(-\frac{1}{2} \frac{x_{i+1}^2 y_{i+1}^2}{1+c_{i+1}} v^2\right) dv \\
 Z &= \frac{x_{i+1} y_{i+1}}{\sqrt{1+c_{i+1}}} v = d_{i+1} v \quad \text{とおける} .
 \end{aligned}$$

Z_{i+1}

$$= \int_{-\infty}^{d_{i+1} \mu_i} \frac{d_{i+1}}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{1}{2} z^2\right) \frac{1}{d_{i+1}} dz$$

$$= \Phi(d_{i+1} \mu_i)$$

$$= \Phi\left(\frac{x_{i+1} y_{i+1} \mu_i}{\sqrt{1+v_i x_{i+1}^2 y_{i+1}^2}}\right).$$

これは $x_{i+1} = 0$ のときも定義され 値が一致するので、したがって $x_{i+1} \in \mathbb{R}$ 成立。

$$\text{以上より}, \quad a_{i+1} := \frac{x_{i+1} y_{i+1} \mu_i}{\sqrt{1+v_i x_{i+1}^2 y_{i+1}^2}} \quad \text{とおける} \quad Z_{i+1} = \Phi(a_{i+1}).$$

モーメントマッチングを行なう。

$$\frac{\partial}{\partial \mu_i} \log Z_{i+1}$$

$$= Z_{i+1}^{-1} \frac{\partial}{\partial \mu_i} Z_{i+1}$$

$$= \Phi(a_{i+1})^{-1} \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp\left(-\frac{1}{2} a_{i+1}^2\right) \frac{\partial}{\partial \mu_i} a_{i+1}$$

$$= \Phi(a_{i+1})^{-1} \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp(-\frac{1}{2} a_{i+1}^2) \frac{a_{i+1}}{\mu_i}.$$

$$\frac{\partial}{\partial v_i} \log Z_{i+1}$$

$$= Z_{i+1}^{-1} \frac{\partial}{\partial v_i} Z_{i+1}$$

$$= \Phi(a_{i+1})^{-1} \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp(-\frac{1}{2} a_{i+1}^2) \frac{\partial}{\partial v_i} a_{i+1}$$

$$= -\frac{1}{2} \Phi(a_{i+1})^{-1} \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp(-\frac{1}{2} a_{i+1}^2) \frac{x_{im}^3 y_{im}^3 \mu_i}{(\sqrt{1 + v_i x_{im}^2 y_{im}^2})^3}$$

$$= -\frac{1}{2} \Phi(a_{i+1})^{-1} \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp(-\frac{1}{2} a_{i+1}^2) \frac{a_{i+1}^3}{\mu_i^2}.$$

よって更新式は、

$$\mu_{i+1} = \mu_i + v_i \frac{\partial}{\partial \mu_i} \log Z_{i+1} = \mu_i + \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \frac{v_i a_{i+1}}{\mu_i} \Phi(a_{i+1})^{-1} \exp(-\frac{1}{2} a_{i+1}^2).$$

$$v_{i+1} = v_i - v_i^2 \left(\left(\frac{\partial}{\partial \mu_i} \log Z_{i+1} \right)^2 - 2 \frac{\partial}{\partial \mu_i} \log Z_{i+1} \right)$$

$$= v_i - v_i^2 \left(\frac{1}{2\pi} \Phi(a_{i+1})^{-2} \exp(-a_{i+1}^2) \frac{a_{i+1}^2}{\mu_i^2} + \Phi(a_{i+1})^{-1} \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp(-\frac{1}{2} a_{i+1}^2) \frac{a_{i+1}^3}{\mu_i^2} \right)$$

$$= v_i - \frac{v_i^2 a_{i+1}^2}{\mu_i^2} \Phi(a_{i+1})^{-2} \left(\frac{1}{2\pi} \exp(-a_{i+1}^2) + \frac{a_{i+1}}{\sqrt{2\pi}} \Phi(a_{i+1}) \exp(-\frac{1}{2} a_{i+1}^2) \right)$$

4.2.6 期待値伝播法

- ・**仮定密度フィルタリング**: 一度学習したデータを捨ててしまい、再び学習: 便りづらい。

✓ メモリ効率は良い

✗ 逐次的: $\lambda, \gamma < 3$ の順序: 近似結果に強く依存。

- ・**期待値伝播法** (expectation propagation)

仮定密度フィルタリングと似たところ: 一般化した手法。

最適化の過程で同じデータを何度も用ひることで、精度の高い近似が得られる。

- パラメータ θ に事前分布 $p(\theta)$ を設定し、各 x_n について $p(x_n|\theta)$ は従うとする。

考え3モデルは、

$$p(x, \theta) = p(\theta) \prod_{n=1}^N p(x_n | \theta).$$

ここで、

$$f_n(\theta) := \begin{cases} p(\theta) & (n=0) \\ p(x_n|\theta) & (n=1, \dots, N) \end{cases}$$

とすると、 $p(x, \theta) = \prod_{n=0}^N f_n(\theta)$ と表せる。 f_n を因子 (factor) といふ。

- 事後分布は、

$$p(\theta|x) = \frac{1}{p(x)} p(x, \theta) = \frac{1}{p(x)} \prod_{n=0}^N f_n(\theta).$$

この事後分布の近似を、次のように近似因子 \tilde{f}_n の積で表す：

$$p(\theta|x) \approx q_f(\theta) = \frac{1}{Z} \prod_{n=0}^N \tilde{f}_n(\theta). \quad (Z: 正規化定数)$$

\tilde{f}_n を指數型分布族の分布にしておけば、 q_f も指數型分布族の分布になる。

- $q_f(\theta)$ が $p(\theta|x)$ をよく近似するよう、各 \tilde{f}_n を逐次的に更新する。

$q_f(\theta)$ のパラメータを適当に初期化しておく。

現在の $q_f(\theta)$ を $q_{\text{old}}(\theta)$ と書く。 \tilde{f}_n の更新を行う。

まず、 $q_{\text{old}}(\theta)$ から n 番目の因子を取り除く：

$$q_{\text{new}}(\theta) = \frac{q_{\text{old}}(\theta)}{\tilde{f}_n(\theta)}$$

\tilde{f}_n の代わりに f_n を用いる分布を $r(\theta) = \frac{1}{Z_n} f_n(\theta) q_{\text{new}}(\theta)$ とする。

新たに近似分布 $q_{\text{new}}(\theta)$ を次のように更新:

$$q_{\text{new}}(\theta) = \underset{q}{\operatorname{argmin}} D_{\text{KL}}[r(\theta) \parallel q(\theta)].$$

これは、 q_f が指数型分布族なので「モーメントマッチング」でできる。

最後に、 \tilde{f}_n を次のように更新する。

$$\tilde{f}_n(\theta) \leftarrow Z_n \frac{q_{\text{new}}(\theta)}{q_{\text{in}}(\theta)}.$$

以上の更新を $n = 0, \dots, N$ に対して繰り返し行う。

- 以上の計算は、各 Z_n の計算ができるならば実行可能
- 収束性については理論的に保証されていないが、実験的には良い性能を示す。